

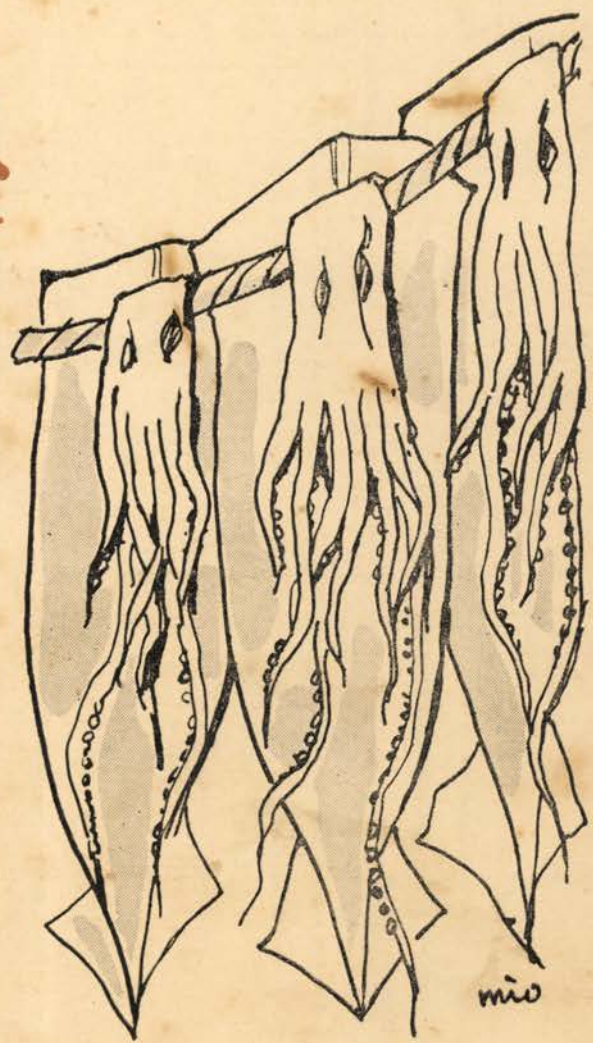
昭和廿二年七月一日第三種郵便物認可  
（毎月一回一日発行）  
創刊大正十三年・通卷三百十六号

Pensoj flugas trans la land-limon

The Senryu Zasshi

No.316

麻生路郎☆主宰



九月號

川  
柳  
の  
雅  
証

# 九月号目次

題字	麻生路郎
表紙	米田三男之助
川柳	伍健・鏡々・夢裡 緑之助・一笑 (一四)
植物痴	麻生路郎 (一三)
塙の句を拾う	八木摩太郎 (一三)
川柳の歴史	福田山雨楼編 (二四)
人間横丁(V)	東野大八 (二二)
荒木哲水君のおもひ出	水谷鮎美 (三三)
勤務醫と走り醫	北川春巢 (四)
所変れば	藤本茶々 (六)
川柳と文法について	桎村鳩守 (三)
川柳江戸船饅頭	阿達義雄 (三)
野介遊く	(二四)
野介句抄	(二四)
読み難い名	長野文庫 (八)
★近作柳柳	麻生路郎選 (六)
川柳塔	麻生路郎選 (六)
同舟近詠	諸家 (三)
一路集 <small>〔注文〕</small> クイズ	清水白柳子選 弘津柳慶選 (三)
各地柳壇	(三)
柳界展望	(三)
不朽洞会から	(三)
編輯局にて	(三)

## 本社川柳忌

時―九月十二日(土)午後六時  
 處―大阪市天王寺区下寺町二丁目  
 (市電下寺町・日本橋三電停前下車)  
 於 光明寺  
 題―「同僚」・「父」・「女秘書」  
 柳話 麻生路郎  
 句評 戸田古方  
 ★今月に限り第二土曜日です。から御注意下さい  
 川柳雜誌社句会部

大阪名菓  
 山崎かみかわり  
 源氏いっしょ

百貨店著名菓子店にあります  
 大阪市阿倍野区晴明通二ノ一九  
 民かまど本舗  
 電話 三三〇九



毛織物  
 既製服  
 製造卸商

株式会社  
**大坂商店**

大阪市東区糸屋町一丁目二  
 電話東 一七四五番

とつと速く とつと便利に  
 とのご期待に應えて

名古屋―大阪 特急 2時間55分

名古屋発 八〇 二〇〇 二六〇 二八〇  
 大阪発 七〇 二〇〇 二六〇 二八〇  
 普通急行はこのほか60分ごと運轉  
**近畿日本鉄道**



# 植物痴

麻生路郎

音について音痴と云う言葉があるが、そう云う云い方をすれば、私は植物痴だと云えよう。木篇の字は随分沢山知っているが、実物を示されたら何んと云う樹であるのか知らないのが多い。ボクで判るのは梅や松や桜や桐のようなありふれたものばかりである。製材にしたら更に判らなくなる。杉や檜や桜やホーなどは判る。ホーやつげは判木に使うのでいつのほどにか覚えたのである。判らないと云えば木ばかりではない。草についてもそうである。

私は生れて一年あまりで母を喪つたので、天地自然になづまずに、人間の愛情を求めるのに急であつたらしい。学生時代に川柳へ走つたのも、川柳の持つ人間味に魅せられたの

であらうと思う。そして人間探求に一生を打ち込んだために、植物痴と云えるほどに植物を知らなくなつたのだと思う。

しかし、音痴が必ずしも音楽嫌いだと云えないように、私も植物が嫌いなのではない。私の日常生活が人間探求でありにも忙がしすぎるので、植物へそぞろ愛情が足りないだけである。私はシヤポテンが好きである。あのマの抜けたような、ヘウビヨウとした姿を見てみると、ところが何んとなくのどかになるのである。シヤポテンは随分うちやらかしにしておいても、平気で花もつけるし、株も殖えて、私のような植物の面倒を見る時間を持たないものにとつて、まことに都合のよい植物である。今私のうちにあるシヤポテンは千石荘の句会の時、河楊梵鐘君の病室の庭先に沢山あつたシヤポテンの中から一株もらつて来て鉢植にして愛玩しているものだが、何分忙いので、たまにしか水をやらない。肥料などは勿論やらない。それでも、別に枯れもしないで、花もつけるし、株の尖に、株が出てくれて、私の眼をたのませてくれるのである。

玄関にある棕櫚竹は、飾り気のないシヨウシヤな姿がうれしい。これは富岡淡舟君が、鉢植のまま、さげて来て呉れたのである。前栽の燈籠の横には、小さな棗の木と小さな山椒の木がある。サンシヨウの木は去年の梅雨の頃、大和の宇陀郡の上田翠光君を訪ねた時二株もらつて来て土におろしておいたのが、二株とも枯れたようになっていたが、ことし

の梅雨期に一ト株だけ生き／＼して芽を出し葉をつけてくれたものであり、おかげで汁のものに木の芽をうかせて、その香を愛玩した。

そして棗の木は、今年の正月に岡山県の大原町へ荆妻腹乃と出かけた時、恵二郎居の句会へ、大野村の土井耗花君がお土産にと云つて持参してくれたものである。これは随分トゲがあり、持ち運びに不便なので枝をなるべく短かくボキ／＼折つて汽車で持つて帰つたのである。多分ダメだろうと思つてしたが、これもことしの梅雨に芽を出して生き／＼と育つてくれた。この棗は日露戦争の時、旅順で乃木將軍とロシアのステツセル將軍が会見した記念に植えた棗の木の子孫なのである。と云う訳は第二次世界大戦に出征した耕花君が、旅順の棗の木に石を投げて七つの棗を落とし、その種子を持つて帰つて三本の棗の木が育つた。私の家へ移つし植えたのが、その一本である。乃木さんも、ステツセルも全く過去の人となつたが、棗の木は私の庭にゲンゼンと実存している。

初代川柳は「木枯やあとで芽をふけ川柳」の句を遺して寛政二年の九月二十三日に他界されたが、私たちはこの川柳を育てるのに懸命である。柄井川柳は歴史のカーテンに遮ぎられたが、私たちへ残された川柳は今もなおゲンとして実存している。植物痴の私もこの柳ばかりは永遠に枯らしたくないと思つている。

——川柳忌を前にして——



—評句—

# 街柳川

前寺村  
田井松  
伍鏡夢  
健々裡  
尼夷  
綠一  
助笑

六月号川柳塔より

伍健 Ⅱ 写生句で格別の感興も  
わきませんが律調は流石で  
す。高さはあるが深き廣きに  
欠けて居るようになっています

が、この逆に仮社務所へ鳩が  
巢を営みかけたとなれば又感  
興が別になります。……  
綠之助 Ⅱ 同感、作者の感覚が  
直ちにはね返つて來ない。感  
覚に大きな開きがあるのかも  
知れません。  
一笑 Ⅱ 申訳程の御本殿は新築  
しているところもちらほら有  
りますが、社務所はいすこも  
後まわしと言ふところ。鳩も

居るには居るのでしようが、  
巢箱らしいものが見えないこ  
ころを作者は淋しがつている  
のではないのでしょうか。作  
者は宮づくり等に研究心も有  
る方ですからそんなに出たら  
目な句ではないと思ひます。  
鋭々 Ⅱ 戦後の神社崇敬感の衰  
退を淋しがつている、作者の  
態度はよく解ります。たゞ十  
四音字調のスッキリした律調  
が、深さが足りなく感じられ  
るのでせうが、作者としては  
下七に余韻を持たせたとこ  
ろに、一つの含意を有するの  
でしょう。  
夢裡 Ⅱ 淡々として誠にあつさ  
りよまれた見た儘の句です。

然かもそれも作者でなければ  
判らないところの思遣りがあ  
るのでしようが……

伍健 Ⅱ 皆さんの評で大體つき  
たようですが、社務所、お宮  
この点で、まあ少し考えて見  
たいような氣も致しますし  
又、句評は句に對し極力親切  
に考ふる事は勿論ですが、こ  
れがなか／＼容易ならぬこと  
で、夢裡さんの言う作者でな  
ければ判らない心境……こ  
ですな、結局、句に現われた  
ところ、きまる点に歸すの  
でないでしょうか。

綠之助 Ⅱ 鋭々さんのお説のよ  
うに下七に余韻を有させたこ  
とも作者の老練で、十四音字  
のあざやかさには敬服する  
が、感銘の度は年令、環境思  
想等によつて各々の開きがあ  
ると思ひます。たとえば若い  
人が恋の句に對したとき、句  
の可否より、恋というもの、  
發散する雰圍氣、連想の發展  
から生ずる「あばたもエクボ」  
式な評價に及ぶ——と同様な  
考え方が、この句については  
逆にあてはまりはしないか、  
余韻に今少しの具体性が望み  
たい。  
鋭々 Ⅱ 淡々たる中に、深い滋  
味を感じ、高い格調が自ら備  
つてゐる爲めに、心惹かれる

ところがあるわけです。

六月号川柳塔より

惚れたとは書かず日記の自  
己辯護 (如川)

伍健 Ⅱ うなづける句で下五に  
一寸わざもありで一本ありと  
云いたいところですが、読み  
返えしよみかえしすると、全  
体がぼやけて來るのは何故で  
しょうか。

綠之助 Ⅱ 上五がズバリと來て  
いるので年令的な太さを感じ  
られ、恋愛をいとしむ若さに  
欠けている。お説のように読  
みかえしてみるうちに全体が  
ぼやけて來るといふことはカ  
ルカチュア化に過ぎた——從  
つて重量感を失遂した——と  
いうことになるのではあるま  
いか。大變けなしたよう  
ですが、自嘲の句として調つて  
いるし、たしかに下五が利い  
た佳句だとは思ひます。

一笑 Ⅱ 意識しているといふ  
いにかゝわらず、自己弁護  
は見苦しいもの、この句は作  
者が古い日記を出して見てそ  
の頃の追憶の中でほろにがい  
自己嫌惡を感じたものと思え  
る。一應まとまつた句ですが  
ことさら興味がわきません。

鋭々 Ⅱ 自己弁護という語句が  
いさゝか耳障りで、そのため  
句意全体に詩情を欠き、読む

者には余り感興が乘らないと  
思ひます。

綠之助 Ⅱ 詩情を欠いたところ  
に好ましからざるものがある  
ようですが、日記を読み返え  
した作者の微苦笑が率直に受  
けとれる表現に依つて救われ  
たと解し、一應いたゞけると  
思ひます。

鋭々 Ⅱ 事實は判るが、句とし  
て描写の視角を変えて見ると  
か何と今一段の推敲を要す  
ると思ふ。

六月号川柳塔より

電車から貴方の事務所見て  
通り (英子)

伍健 Ⅱ 何んでもない句のよう  
で、よく味うと曲線も直線も  
あり作者の年令、性別、心境  
も判つて來て一輪ぎしの花を  
見るようです。但し下五が稍  
や早く妥協した感がないでも  
ありません。

綠之助 Ⅱ ものやわらかい素直  
さがうれしい。下五も滅多に  
ひねくると一ぺんにこわされ  
るような氣がします。伍健さ  
んの評は確かに妙だ。

一笑 Ⅱ この句は面白い。私は  
穿の句と想ふ。事務所、事務所  
と云うけれどこの間市電の  
窓からチラッと見せてもら  
いました。わざ／＼お伺いする  
までもなく外観だけで沢山で

すと言つてはいる様に取れますが。冷かされている様な氣持がします。

鏡々々一笑氏の説に同感。人物と對話の状況を想像するど、自ら微笑を覚えます。「貴方」がよく利いている。

夢裡女性句として坦々として味わえる句ですね。

縁之助一笑さんほど氣がつかなかつた。そのような解釈も間違ひではないようですね。その方が点がよい。僕はその逆と思つていました。つまり、ほのかな思慕を抱いて……の方向を考えていたが少し甘いのですか。

一笑鏡々氏が私の説に同感だと言われますが、心境の變化か、今この句を見ると伍健氏や縁之助氏の説に同感です。

鏡々々二つの違つた意味に解釈が出来るということは、その句が完全でないということが云えるわけで、だから作句者は、句の出来た場合、一應第三者的立場に於て、慎重にその句を検討して自己の意図が明かに表現し得られているか否かを先ず調べて見る必要が、大いにある。

す。要は伍健さんの御説でつきておりませんか。六月号川柳塔より  
ぶら下る吊皮にまで呑めとあり (香林)  
伍健君即興的句で仕立て方も軽く一筆描き墨絵の味もありませんが、一寸線が、ぞんざいで香りが乏しい様です。ぶら下つた御本人の心境でしょう……な呑めは飲めが本当でないでしょうか、いや「のめ」とするのが、よいようにも思いますが。  
縁之助君句意が呑みこめません。ぶらさがつた本人さんの心境と解するなら、ぞんざい説に賛成します。下五が生命でしようが、五七の繋がり不自然さがある。若しこれでいゝ、よくわかるではないか——ということならば失礼乍ら軽すぎます。

一笑君銘削した時にはそんな感じもすることが有ろう。心境に共鳴は出来る。呑めは「のめ」に賛成します。

鏡々々電車の吊り皮にまで飲めた酒場の宣傳を見て、飲み助は、或は誘惑を感じ、或は我が意を得たりと思ひ、道義者流はその吊り皮を持つことさえ嫌悪を感じて、眉をひそめる。電車の小さい吊り皮に、

市井哲學を發見の作者の着眼は鋭い。ぶら下る(本人が)があつて此の句は生きています。

夢裡これはどうも呑めない者にのめとは、こんな吊皮にまで云うあまり我が意を得たとは思われない作者の心持ちを想像する。

縁之助君吊り皮にまで廣告があるとは全く知らなかつた。田舎者の恥しきです。前言酷評お詫びと共に全部取り消し鏡々さんへ賛成。

一笑君吊り皮に宣傳廣告が飲められてゐる事は私も知らなかつた。したがつて前評は私の勝手に想像したものに過ぎません。

鏡々々これは諷刺的意味の方が、多分にあるが禪堂で老師から、ピシヤリと一撃されたように後味のよさがある句です。

六月号川柳塔より  
生き抜いて来てこそくと妻を責め (梅志)

伍健君生活戦線の一情景と思われませんが、それにしても上五が「あくが強い」ようです。他人へ説く口と妻に云う口とは別とか、少々金が出来て、コセつて来たとか、こんなねらいでしようか。帽

子と服と履物が別々の様な感が致しまして。  
縁之助君一説冷たいものを感じる。若い人から見たら隣家の老人への侮蔑かも知れませんが、少々年齢を重ねてみると何んだか忠告されたようでは些か胸に来る。少々誇張かとも思うがそれほどのひびきを保持しているところに秀作とまで

いかないまでも掴むところは掴んでゐると思ひます。帽子と服と履物が別口とまでは思いませんが些かギョチなさがあつて、特に下五に目立ちます。こゝに在つたでしよう。

一笑君表現に技巧的でない爲ざごちないでしよう。生き抜いて来た現実主義の夫がその氣持に少しもついて来ない理想主義の妻をこの頃責めることが時々有ると云つていて、でしようが作者は責められてゐる方に同情してゐるようです。

鏡々君生き抜いて来た夫、コセくと妻を責める夫、とだけで大した皮肉も感じられず、ユーモアも感じられませぬ。長い生活歴史も、現実の情景も表現されて居らぬ点で興味が出ませぬ。

夢裡君苦勞しぬいたくせにまたコセくと妻を云う側から見れば自然に嫌悪を感じる他人の御節介、よく判る句だと思ふ。

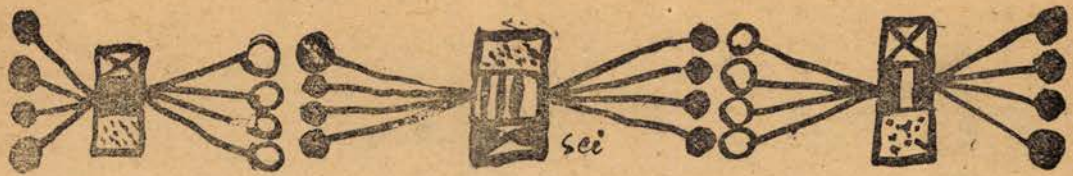
伍健君生き抜く苦勞しぬく……その修業し抜いたある安定線で、意外にも苦勞人が妻を責める。世間には例の沢山ある人の様にも思へ、作者のネライにも敬意を表するが、句の仕立てが、帽子、服、履物、の揃つた、或は揃はぬ、それ……の感興の高低は、調子、姿、に原因があるように思えてならない。

一笑君誰しも平凡に生きて来た人はない筈。生き抜くと言つた上五には並々ならぬ苦勞が秘められてゐる。結局苦勞が過ぎて一種のひがみを持つてゐるのかと思ふ。その意味で私は責めている男の方に同情したい。

鏡々君此の夫は七轉八起世の荒濤を切り抜けて来たのではなく、うだつとも上らぬまゝにあくせくとやつて来た小人物と感ぜられるが、特別なアイロニーもなく、たゞそれだけの人物描写に終つてゐるの

で、大した感興が起らない。夢裡君これも大した妻君ではないが私は妻君に同情したい。句の構成から言つて鏡々氏の式次説で耀如としておる様に思ふ。

夢裡君最初の四氏の御批評でそつとして置きたいと思ひま



池田市 戸田 古方

不勞利得ちつちやいちつちやい不勞利得  
コンマ一つちごていた金利

尼崎市 水谷 鮎美

膝まくら妓にあつたのどの疵  
不倅ばかり世話好き探しあて

亡き荒木哲水君をおも

君の声が大空から降りてくるよ  
灰皿へ自嘲の灰をまた落し

大阪市 市場 没食子

パストマイ、ビドラジツトも効かず梅雨  
呑み過ぎに効く錠剤を仲居くれ

御見舞にゆけば病人呑んで去ね  
妻も子も酒量のふえたのを案じ

夫婦とも眼鏡をかけて御出勤

豚のよな女をキリンのよな男連れ  
共稼ぎ妻も五十に手が届き

悪咀には縁なき妻となり寂し

縁切れになるよな金で貸すを止め  
力及ばず蔭でゴチャ／＼妬いている

バスも電車も事故で遅れて雨に会い

グミ熟す子等と疎開の頃話す

告訴する用意診断書も頼み

横浜市 福田 山雨楼

おばあちゃんんの賣春法案行惱み

最高裁まだ平沢を飼い殺し

吉田から緒方とすればどつと落ち  
錆早し世をはかなんだ十円貨

ホノル、市 内藤 草一郎

藝名で親より大きな墓が建ち

エプロンの如くに心も清ければ

据膳へ年も纏綴もなかりけり

言外に親を恨んだ混血児

買ひ振りに見せた市場の子沢山

封建がたゝり娘に苔がたち

抱き寄せて欲しい心で拗ねて見せ

他人では無いと仲居の眼が高い

京都市 村松 夢裡

堰きつた様老らくの是非がなし

大阪市 川村 好郎

九州よりましとならべる鍋揚げつ

子沢山みんな着てゐる食べてゐる

青函航路夜航復活

いつ迄も機雷流れぬ海であれ

鞆持ちもよし飛行機にも乗られ

五十回誕生日

散髪屋痛々しそうに分けてくれ

このまゝで別れませうと女は強し

しやわせは七十歳ののど自慢

ホノル、市 築山 快夢起

夏海どちら向いてもアダム・イヴ

未亡人生命保険もあるそうな

新築へ嫉みもあるか寄つて来す

通帳胸算程は利子つかず

大牟田市 高田 抱逸

パチンコの名人級で職がなく

米子市 三鴨 美笑

同性の心中も夏の山らしい

母方の寺へあづける夏休み

子の夢は明日の野球を見てるだろ

支那服を着て出る妻はまだ若し

鳥取市 大西 八歩

講釈の割に小さな鮎の漁

皆食べてゐるんだ弱氣捨てましよう

水害がM・S・Aを上廻り

出世した顔は漫画にまで書かれ

大阪市 須崎 豆秋

常識がない振りをして儲けてる

偉い人だつたがやはり灰になり

金やると物の言い方までかわり

踏まれたりするのがいやで屋根の草

屋根の草同志下界を汚ながら

饅頭でも酒でもたつしやなもんですわ

つばくろめ船場生れの燕尾服

大阪市 正本 水客

傘貸してくれた女給の名を忘れ

三十を過ぎて素直に嫁にゆき

別室で着替えて女帰らぬ氣

押花が出てきた本にうろたえる

オリゴール星の言葉を傳えきて

大阪市 丸尾 潮花

或る意味の就職ですと養子言う

猫の眼の青さへ娘ふとおびえ

夜の宇治川

放たれた螢へ觀光バスが着き

寝ころんで死んで逝く日を話しあい



月賞める心を妓もちあわせ

お寺の蚊もろい生命を悟つて居  
バラ／＼に出来たらしたい人を持ち  
殺されに行くハンドルど知らず持ち  
避妊する愛を男にうたがわれ

大阪市 北川 春 巢

つばめ号カメラを肩の人が降り  
立飲みへ寄る氣袍を持たず出る  
帽子屋の目にノーハット多いこと  
蝶ネクタイ満足してる顔に見え

奈良県 尾崎 方正

べちやんこになつたお乳房で終い風呂  
ピカ／＼と光る機械へ脳貧血  
夏期講座扇子に聴かすよう喋り  
老いてなおオートバイ乗る身のあはれ

大阪市 菊沢 小松 園

先妻の子が負けそうで氣をつかい  
毛糸編む手許見詰めて居る養子  
ひたかくすすべを女の子の覚え  
きつとなりへ／＼と笑い生きる難さよ  
皆んな苦しんでるのよと慰められ  
仲裁を蹴つて行李に繩をかけ  
泥捧の通げた窓から首を出し  
金のない友達ばかり附いて来る

大阪市 武部 香 林

人間の弱さが耐を手放さず  
想い切つたのに橋の真ん中で出逢い  
轢かれたのやないかと妻は喰べす待ち  
荷造のように濕布をしてもらい  
妾宅と云えず一寸そこちよつとそこ

汲取券一枚にさえムキになり

年令だけが見貴ですよと悪びれず  
酔う事も社交の一つ五十過ぎ  
守衛とは言われたくなし脊廣さる  
一人だけ出世させたい子沢山

大阪市 水谷 竹 莊

世話好きが世話をしすぎて叱られる  
市場籠夫の好きを見のがさず  
冗談に抱擁すれば子が見てます  
御中元持つて女將ははでに来る

下関市 弘津 柳 慶

母さんも少し野球がわかりかけ  
年とれば小言が少しくどくなり  
喫茶でもなさそう提灯ぶら下り  
社用族パチンコ等にふりむかず

大阪市 吉田 斜 水

雨も亦楽し彼女の傘に入り  
窓開けて夏の電車が突つ走り  
雨よ降れ／＼母さんの下駄履いて  
取れたとて大和撫子どこへ行た  
軽くみた恋へ混血抱いて泣き  
そわ／＼と自由達ひの子を孕み  
折れて居る親父と思えば氣がひかれ

大阪市 山口 秋 花

地下鉄のラッシュ乳房がつぶれそう  
誕生日主人公のみ下戸にして  
誕生日また用ができ用ができ  
大関市 富岡 淡 舟

パレーしているよな松の下の恋

すばらしい服装をしている使い込み  
もう一度男にしてやる金を貸し  
女四十白髪染とはよう老けて  
腹からの笑いがほしい世相なり  
梅雨のような愛情には閉口だ

奈良県 飯 降 白 香

名譽職逃げて儲ける秘策ねる  
頼杖に孫も五十の形をし  
指折つて見れば銀婚どうに過ぎ  
羨望の名所に埃を浴びて住み  
税務署のお世辞どうやら人違い  
易断にうなずく過去の不倖せ

山口県 長野 井 蛙

父の死  
両の手にある骨箱のあたゝかさ  
生活の縮図に父の再がする  
訃報うつウナの字数がまごまらず  
手の豆が明日への僕を侮蔑する

大阪市 上田 春 柳

斗病三年妻の香いも忘れかけ  
寢室の藝術と言うストリップ  
たき付けても妬かぬ女へ腹を立て  
半殺しにして欲しかったと惚れており  
妓の悲鳴を羨む程に女將老け  
娼婦今日聖書を出して読み耽り  
ネクタイを腰紐にして妻若し  
酔ふて見たいと女口先丈けのこ

奈良県 直原 七面 山

部隊長も勤めたことのある仲仕



仕立物の札クルツ〜と秋深し  
 クラスのホープが父なし兒を孕み  
 憧れの夜の銀座でなぐられる  
 機関車の重量感に似て太り

義理で来た病氣見舞は門で辞し  
 牛の尻叩いてバスを振り返り  
 配給米の身に再軍備とは可笑し  
 子の無い淋しさへ増えてゆく植木鉢

サラリーマンです麦刈りへ腰伸び切らず  
 感情に走るには年取り過ぎて  
 ワンマンの失言助け舟もなく

西宮市 石岡正司  
 学者では食えず夫人はバーに竹つ  
 日傭の寡婦の素顔がきれいすぎ  
 女秘書絞れるだけは絞りとどり  
 應接間はら〜させる妻の嘘  
 中華そば四つ徹夜の牌が鳴る

大阪市 西森花村  
 消しゴムで消す様処女の名と別れ  
 演習に踏みつぶされし鎌切りよ  
 水よりも政府の無能に泣きたいね  
 病院え来るにも子供菓子が要り

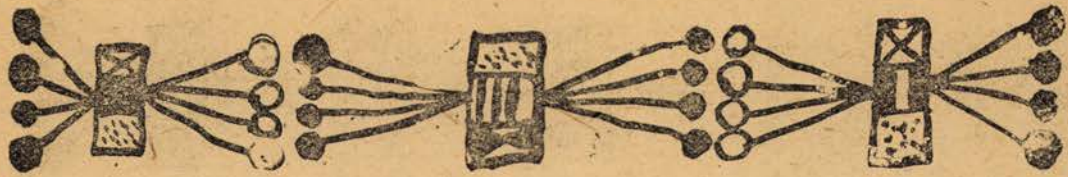
兵庫県 家沢齊花  
 石段の数読む若さ羨まし  
 しまいには傘屋も敷く長い雨  
 末つ子の涎も可愛いもの〜うち  
 文化賞田本が出た頃の人  
 縁談は棚上げにして麦の秋  
 経木書よくも落武者揃えたり  
 ビール好き工場のデカイのにあきれ

酒呑むなど上手に唄い乳も呑み  
 花貰つて男しようことなしに挿し  
 婦國船こゝにも悲し右派と左派  
 陳情がすめば六区のレストラン  
 引揚げも四次ともなれば少しごと

東京部 藤本満年  
 ゴルフ  
 社用族恋しゴルフもせにやならず  
 水害  
 洪水ヘラジオのどかに喉自慢  
 熊本県 西口如川  
 養子にも発言権はありながら  
 偽らぬ鏡は皺へ無慈悲なり  
 岡山県 福島鉄兒  
 六月七日夜半盗難に逢う (三句)  
 よう寐てるなど泥棒の思えらく  
 盗人の前にはもろい錠なりし  
 盗品を包むカーテンとはなりし  
 東京都 藤本茶々  
 一一〇番へ掛けたいようなゆすり来る  
 炎天下アラエツサツサーと刈つてゆき  
 異常なく散歩に出たよなパトロール  
 大阪市 塩浜一路  
 もう一度叱つてくれよ父は老う  
 スタレだけ買ったボリーナスそれもよし  
 裏街が暑く更けゆく水都祭  
 腕時計だけが高價な教授連  
 大阪市 西いわを  
 生活の爲さ男の二三入  
 養子又次の養子を考へる  
 岡山市 服部十九平

池立ちの悪いシャボンに似た女  
 朗らかに失敗してる隠し藝  
 焼き直しして一冊の著作権  
 舞鶴で桃色がかつたのが騒ぎ  
 尼崎市 長谷川三司  
 プランコの縄切れたまゝ梅雨に入る  
 振り袖の二世が囲む皇太子  
 釜めしで晝をすました映画評  
 一日の疲れへ塩さけとは淋し  
 兵庫県 若林草右  
 御承知の通りで講演つゞくなり  
 叱る子に若かりし日の我を見る  
 風向きを氣にして坐る程に禿げ  
 一ト七日佛の好きなサノサ節  
 葬式の演出効果錠の音  
 熊本県 有働芳仙  
 教授では食えぬ文化の國に住み  
 情けない女給風情に子をさられ  
 駅弁にバトンタツチの所作があり  
 水禍雑詠  
 矢の様に走る丸太へ観音経  
 炊き出しへ生命に縁のあつた顔  
 復興  
 復興へ足と両手があつた幸  
 宣傳もあろう水害見舞金  
 へし折れた橋頭張つた姿なり  
 高知県 大西迷窓  
 女房の希望の鶏をやつと飼ひ  
 パチンコへ行かないでネと送られる





下関市 阪田良坊  
医者という弱身夜中の雨に出る  
翌朝は課長けろりとしてそり身

下関市 石川侃流洞  
赤い爪光るダイヤは本物か  
引揚のやつぱり藁屋をなつかしみ  
夜業ばかり続いて子供に嫌われる

大阪市 安岡瑠枝郎  
握手する氣で出した手のやるせなさ  
良い娘だが惜しい事には世辞がない

広島県 山田季賛  
借金があるが温泉良い所  
朝顔へ課長自ら水をかけ

大阪市 山本葉光  
女事務飯病を使う年になり

打算的魅力で同情おしみなく  
氣のつかぬ風で知つてる腫がきれい  
脇息を置き替え人に会う姿  
新築に傷つきそうで落ちつけず  
励まして呉れるが意地の悪い声

大阪市 東喜久堂  
入墨も羨び今では善い隠居  
コンクリの塀を廻ぐらす無風流

倉敷市 木村千容  
シャパンヌの漁夫は釣り上げそな構え  
守銭奴が口頭痛にリョウマチス  
一等車もうでがらしの赤談義  
日本の代議士さんに殴られる

倉敷市 田垣方大  
研究が妻を不貞に追ひこめり

非農家が目ざわりになる農繁期  
失恋へ花火うるさいものにされ

石川県 那谷光郎  
時間表睨んでウドン熱過ぎる  
新調のカメラへ母を坐らせる  
逝つた祖父袋に種子の覚え書

石川県 野村味平  
里帰りさせ仕出屋に借が出来  
サーカスはリズムに乗せて恐く見せ

大阪市 木村水堂  
父ちやんが叱られたのをふれ歩き  
不朽洞にて

雑談がつきぬ師弟の水入らず  
ともかくも弟子の線までレベル下げ

熊本市 花岡英子  
水害の地において

罹災者の方が明るく應待し  
まだふえる水かだまつたまゝみつめ  
罹災者の一人となつて記事をよみ

堺市 八木摩天郎  
思い出は昔のころの花鉢  
おばあちゃんの話五厘の葱のころ  
ストリップも團扇を借りている楽屋  
相済まぬように佛壇の母を閉じ

紀州水書  
お母ちやんお母ちやん云うて流れゆき

高槻市 福田丁路  
ハリストを拜んで通る人もあり  
同情が過ぎて公金費い込み

足場から下界の暑さ思いやり

倉敷市 水谷谷水  
バーを出て女関までは強かりき  
囲ふもの囲ひ慈善家如才なし  
母親か娘か男繁く来る

倉敷市 相原一善  
わかつたに長女のまへでヒスめいて  
純情ね見直したわと酌ぎこぼし  
酔わせてよあゝ酔い給えと言えぬ身の

今日からは失業保険もらえる身  
紐付の祕書とは社長知らずおり

岡山県 田村藤波  
女中から先生夫人になりすまし  
一本の紙捻に課長ベルを押し  
生字引表彰されても元の椅子

岡山県 岡田夜潮  
病んでてもかくして言わず田植時  
なまけても近所が田植はつとがす  
田上りにゆつくり来いと取り合わず  
飲んだのと問えば田植の日焼けです

ごますすに答えてお暑うござあます  
出ぬ母も明治の下駄を履きつくし  
拳手の札又ぞろ流行つて来そうなり  
後妻だとも云われ女中だとも云われ  
蓄めるのに字引の要つた事がなし

後任にアチャコ先生に似たのが来  
容疑者がどてら姿で逮捕され

岡山県 坂井三葉  
五人目はもう御祝もして呉れず

店先え出れば頑固な父でなし

岡山県 政田 大介

父ちゃんの暢氣へ娘熱れてます

ホルモンの話で重役会議すみ

岡山県 白井 三林坊

スペースがもう三面にない世相

お濠端悲しい恋はただ歩き

権利義務雲が静に流れてる

大阪府 青柳 扇子仙

女房よりごなりの女房よくふごり

アマゾンに行く親類へ包む金

誘われて桂離宮へハイヒール

岡山県 岡村 牛耕

團欒の湯氣を間借りはチラツと見

お弁当忘れたのではないらしい

片ツ端から團扇破いて子は育ち

水打ちが早く歩けると言ふ眼つき

酔ふてない方が一隣青くなり

茨木市 下山 清潮

退院の子へ副院長も手をにぎり

夕立の行く方向へ電車行き

岡山県 本田 恵二朗

ほつといて欲しい涙へ見舞客

声がわりパパと意見がちがひ出し

事足りぬ晝寝行水それビール

大阪市 眞鍋 一 瓢

金魚鉢こゝ二三日藻だけ浮き

稼ぐ夫忘れては居ぬ刺身皿

朝帰り廊の霧の深いこと

正直に貧しき言えばおもしろがり

律義だけ買つて貰えてもう言えず

借金があるとは見えぬイヤリング

青空を見給え人生も亦樂し

恩賜の手今日は淋しくギタイ弾く

モンテンよさらば同志よ帰れるぞ

豊中市 村上 ゆずる

激論をして来たらしい顔の色

挨拶も出来ぬに背丈だけは伸び

柳友龜崎漫歩氏支店長に榮転

森本 法泉水

発令に先づ短冊をもつて行く

保身術末席へ来て飲んで見せ

トランク揚げたは僧のアルバイト

鳥取県 日置 文郷

逢いに行く足は次第に速くなり

ピクニック此処も砲声響くところ

男らを泣かした話嘘まじる

半世を話しニコヨン見直され

家へ着く迄学生の標準語

大阪市 佐野 牛歩

メトロにも勤めて居たと云うパンパン

うぬぼればわたしの外にない委員

部下の行く飲み屋へ行つて飲まされる

大阪市 後藤 梅志

さむらいの子にする慾ももつて居る

生駒吟行吟(六句)

時鳥來年泊ることにする

山いちご達者な足が前をゆき

頂上へ来て鶯を聞き直し

飛行塔いゝ子になつて降りて來くる

ケープの中まで三味の音がとゞき

水くれと云へず茶店の客になり

大阪府 小池 しげを

座り込み蝶ネクタイも居りました

看護婦に治してもらつたようなもの

バス車掌渡辺はま子と云う名前

農薬にまでアチャカラ製やつて來る

氷屋と話せばまだ涼しどか

日傭が波浮の港を唄うてた

三人で五百円なり御佛前

兵庫県 竹内 圭三

ふちなしの眼鏡が似合う若社長

あゝしんどかつたと温泉から帰へり

路地裏の暮しに避妊薬たかし



たっぷり

愛嬌たっぷり

B1 たっぷり



疲労と胸氣に

強力 **メタボリン**

錠・庄・無糖注



# 人間横丁 (V)

東野 大八

## 維縣の酒

印度人サバルアルは、いつも資料課の片隅で置忘れられた冬瓜のように、ひねもす独りぼつちだつた。華北交通囑託というのが肩書だつたようだが、どこの会社でも囑託というものは佗びしい存在である。特に彼の場合、ほとんどの仕事は、あたりの日本人の連中が手取早く片づけてしまうので、これという目立つた仕事に何一つない。大きなあくびを連発しながら、北京の青い空をぼんやり怒越しに眺めていたり、退屈な顔で英文の袖珍本をひろげていたりする。

私がこの退屈な印度人とのみ友達になつたのは、王府井のおでん屋であつた。M紙の記者として出入りしていた私を、彼は遠目ながらも承知していたとみえ、この飲み屋の片隅で偶然隣り合つて坐つた私を、旧知の友人を迎えたやうにいきなり心やすく握手し、前にある酒をやつぎ早やに私の杯に満しつづけたものである。

印度人という人種は例外なく身体が大きい。彼も典型的な巨軀の

の同志と自称する印度貴族の彼にはうつつけである。彼は「大ちゃんのために一丁名文をものしよ」と大島の上下の袖をまくつて糸車の旗の下でさかんにタイブを叩いた。ロシア人の一間を借りていて、お茶をいれる彼の細君は日本人である。ユーモリ傘の柄を抜いたやうな黒いワンピースで、無口で控え目な彼女は、印度人の妻としての立場を、もとより誇りとはしていない。むしろ反撥してその精神的な悲哀の何かは、自虐的な虚無にまできている。暗い日陰の花、私の彼女への直感ほこれだつた。

日本語はペラペラ、ど、いつの一つでもうなる彼は、東京での生活は名士文士有識者を相手に相当派手なものであつたらしいが、桃色事件を起して東京追放となつた由、酒と女で身を持ち崩した彼はどうして華北交通の一員となつて

持主で、目分量からしてもざつと二十四・五貫。まるで露天仏が歩き出したやうで、エネルギーが豊富なこと南支の水牛の如しである。随つて酔えば、ライオンのように吼え大きな八ツ手のやうな手で私の両手をギューギュー締めあげるやうな握手をくりかえす。ターバンのない印度人の頭は大仏様のようにちぢれ、一つづゝ渦をまいていく。黒い皮膚が真赤に染むと、その異形な頭と無格好な七面鳥の鼻のごとき顔中央の肉塊が妖しく律動する。その形相はまさに羅刹ともみまがう、といつても大げさではない。だから私は彼が酔いはじめるとへき易して逃げ出すが、彼はそうなるかと快して私の身体から手を離さない。とうとうあきらめて私が坐り直すと、彼は歓呼の声をあげてして勘定をすべて私に押しつけるのである。

首相東条が、日米開戦程なく「印度に独立を与えるであらう」と国会で大見得を切つた。このニュースで、私ははじめて彼の自宅を訪づれた。祖国独立と在華印度人のこのテーマは、チャンドラボース

物を用意してコツツリこつつけられた。一本のサイダー瓶に彼の好きなシナ焼酎を詰めたもの。サバルアルはこの収容所にいたのである。だがその連絡もきかないうちには私は出征した。

戦傷をして現地復員、帰国を待つ邦人がまだ北京に待機していた。某日、私は久しぶりに街に出た。敗戦国民の王府井散歩も、ひどく肩身の狭いものになつたものだ。と思ひながら陽陰を選んで歩いて

「俺の留守中、近所の日本人がスバリの妻だと、俺の女房をいぢらぬいて、配給もやらなんだぞうだ。一発ぶつ放してやる」と私の前で物騒な筆銃をふり回したこともあるが、私はそれを押なだめるのに一苦勞したこともある。いよいよ私が大陸を離れる日、彼は一夕私のために送別の宴を張つてくれた。席上彼はしみじみとこう述懐していた。

「俺は終生、サイダー瓶のあの酒は忘れんよ。そして俺をいぢめた日本人も懐しく思うことも変りな日本。君が日本へ帰つたら、酔うた君が俺をつかまえていつた。おいサルバルサン、という言葉でおい、おれのことも想い出してくれ」

そう寂しくいつて、毛むくじやらのあの八つ手のやうな手で、私の細い片手を取り何度も何度もキッスした。



# 堺の句を拾う

## 八木摩太郎

物の始は、何でも堺で三味線、鉄砲、金魚、傘、春慶塗皆堺が始めである。又、人も奇妙な人の生れるところ、利休に、小唄開祖隆達、曾呂利、浪六、曾我の家五郎将棋の坂田、酔茗、晶子、西蔵探見家河口懸海、浄瑠璃の春太夫、女装のまゝ婦宅し夫の情婦だと間違えられて女房に妬れた二代目中村富十郎等がある。それでは、お手元拝見、サテ川柳界は、考古学、堺史談、の著者河盛芦村翁（霞乃先生嚴父）、關秀作家のNO.1霞乃先生、劇作家の食満南北氏がある。

川柳に表れたる堺、堺を詠んだ句は沢山あるが、少しく茲に書いて見よう。古句に

堺の刃物に鉄砲の銘  
がある。堺の刃物は古来有名である。刃物にまで鉄砲の銘のあるところが面白い。

焼けたなら焼けたて堺と  
云う薫り (生々庵)

オランダを思い煙瓦の堀ま  
行く (貴山)

しかし、水族館は七月一日から再開された。矢張り東洋一である。

初戀の二人水族館へ消え  
(路 郎)

水族館おこせと鼻をつき  
合はせ (路 郎)

硝子まで来てバツクする  
櫻鯛 (霞乃)

硝子越に見る魚の生活、女の帯のそれより美しい魚の眺めは一入である。

マニキユアの指に蟹奴が  
つまゝれる (春柳)

不夜城の竜神、絃歌さんざめく昔の竜神にはあまりに、未だ遠いが、いずれ竜神も昔の面影を示すだろうか。

特急もよし竜神の君を忘れず  
(路 郎)

竜神から少し三丁程東へ行つたところ、ちくまのそばといつて甘いそばは喰い倒れの大阪人も一目置くだらう。

商談も少しまじつちくま  
なり (路 郎)

大寺餅も亦有名だ。「うまい大寺餅」の荷をかついで売りに来た声は昔のこと、又、天下広しと雖も客を背中にして餅を渡し、銭を後ろ向いたまゝ受取つた大寺餅も、昔のこと、しかし味は昔と変らな

竜神へ廻らぬ客は餅を買ひ  
(路 郎)

大寺餅も亦有名だ。「うまい大寺餅」の荷をかついで売りに来た声は昔のこと、又、天下広しと雖も客を背中にして餅を渡し、銭を後ろ向いたまゝ受取つた大寺餅も、昔のこと、しかし味は昔と変らな

竜神へ廻らぬ客は餅を買ひ  
(路 郎)

大寺餅も亦有名だ。「うまい大寺餅」の荷をかついで売りに来た声は昔のこと、又、天下広しと雖も客を背中にして餅を渡し、銭を後ろ向いたまゝ受取つた大寺餅も、昔のこと、しかし味は昔と変らな

竜神へ廻らぬ客は餅を買ひ  
(路 郎)

大寺餅も亦有名だ。「うまい大寺餅」の荷をかついで売りに来た声は昔のこと、又、天下広しと雖も客を背中にして餅を渡し、銭を後ろ向いたまゝ受取つた大寺餅も、昔のこと、しかし味は昔と変らな

竜神へ廻らぬ客は餅を買ひ  
(路 郎)

大寺餅も亦有名だ。「うまい大寺餅」の荷をかついで売りに来た声は昔のこと、又、天下広しと雖も客を背中にして餅を渡し、銭を後ろ向いたまゝ受取つた大寺餅も、昔のこと、しかし味は昔と変らな

竜神へ廻らぬ客は餅を買ひ  
(路 郎)

大寺にて  
客を背に餅賣れること賣れること  
(路 郎)

山を背に通つて食べてみるのも一興である。

山の口河内の人に逢うところ  
(路 郎)

大寺へ来て店のあるを知り  
いゝ年で大寺の鳩追ふてある  
(朝陽)

は昔のなつかしい思い出である。

茶店の娘落した物を見逃さず  
(一路)

二のつく日の出店、植木市も次第に昔の通りになりつゝある。

今は昔、二十年前に宿院交又点  
東入りにカフェ大学、カザリン  
摩天楼と云うカフェーが並んで  
いた。嬢給のサーピスも満点と云う  
盛況さ、摩天楼と摩天郎！今は  
摩天楼は無い。

夜の街ここはカザリン摩天楼  
(路 郎)

畏し、明治天皇行在所は、中の町霞乃先生の曾祖父河盛仁平翁の別邸で、しかも明治十年二月十三日夜半、当所在所御駐蹕の砌、京都から急使馳せ参じて、西郷隆盛の反を奏したので御前会議を遊ばされたる所であるが、戦災に焼失したのは惜しみても、惜しき極みである。

寂として明治天皇行在所  
(路 郎)

寂として明治天皇行在所  
森鷗外博士著述の堺事件として  
(路 郎)

寂として明治天皇行在所  
森鷗外博士著述の堺事件として  
(路 郎)

寂として明治天皇行在所  
森鷗外博士著述の堺事件として  
(路 郎)

寂として明治天皇行在所  
森鷗外博士著述の堺事件として  
(路 郎)

の妙国寺、坪内士行の劇化等て有名な妙国寺は、家康が大阪冬の陣の真つ最中、堺に泊つた時、妙なりや国にさかゆくそてつ木の

きゝしにまさる一もとの株  
と口ずさんで、非常に珍しがつた  
蘇鉄のある寺で、今もその蘇鉄の  
寺である。

妙国寺ふと腹巻に手がさわり  
(かほる)

蘇鉄寺腹の切りやうまで教へ  
(路 郎)

妙国寺土佐の訛りの鼻高し  
(助 六)

腹切の話に空が曇つて来  
(かほる)

忠烈へあんまり小さい墓で  
あり (吞陽)

妙国寺説明簿はいてあず  
(松 郎)

蘇鉄から説明をすする妙園寺  
(二柳子)

妙園寺見料だけで家根を葺き  
(秋晴)

立札も蘇鉄の色に染まる寺  
(一路)

出展つてからの蘇鉄は幅が  
き、 (松雨)

土佐十一烈士の墓は宝珠院にある  
宝珠院フランス兵の墓もあり  
(助 六)

高野線堺東駅一丁東北の方違神社  
は、方崇りの災が除かれるので、  
各地から杖を引く人が多い。

方違ひさても便利な願所

(源 坊)

は川柳家ならねばと思わしめる。

堺の三陵……。殊に一番大きい

御陵！……三重堀の御陵、仁徳御

陵の御陵道改修はその昔、青年団

が奉仕した。

御陵道青年団の聲をほめ

(ひろし)

御陵の前で捕ふて帽を脱ぎ

(鮎 美)

又一人あとからおがむ御陵前

(眼 声)

陵の前蛙啼き牛が啼き

(舟々)

大阪の生れ胡瓜の珍らしさ

(玄 水)

近道を穂麥の中に見つけ出し

(酔 夢)

鮎の味みささき二つまがみ

(飯 山)

陵へ塚あたりの笛がなる

(舟々)

浜寺は昔から海水浴のところ。

濱寺は二個連れだけの秋と

なり (万よし)

濱寺は海と裸の夏景色

(桂 枝)

濱寺に任めば日やけまうれし

がり (錦 石)

の句がある。

天野屋の度胸塚の出る話

は私の拙吟である。よく四十七士

を助けて堺の町人として、知られ

た天野屋利兵エは、今の大阪の国

際見本市会館のところに住んで、

堺に工場だけあつたのであるが、

その義侠は堺の町人風を發揮

し、南蛮渡来の貿易に納屋一族ル

ソんに、大名に屈せぬ堺魂は利

休、曾呂利に、自由都市として町

人芸文に、その伝統の意氣をつ

ぐ、五郎、晶子、浪六等の世に出

でるのも、豈不思議ではあるまい

と思いつゝ筆を擱く。

### 詠 舟 同

松山市 前田 伍 健

いれずみがほしい議会のわめきあい

鱗はぐ如く日本雨禍風禍

露草がバアーミ云いそうもう秋さ

今の世に別嬪さんで食べられず

金沢市 安川 久 留 美

老田のサツ尊徳に不平なき

大阪市 麻 生 葭 乃

もう先は半みちさう藁屋へ來

恒例によつて綿匄う寄附の組

盂蘭盆の風にながれて來た蜻蛉

## 川柳と文法について

梶村 鳩 守

最近の柳誌を見てみると、現在の

の川柳を型態づける基本的用語の

文法的理解が少しもありません。

路郎先生の「眼の散歩」の中に警

告してあつたように「川柳の作句

に於ては推敲又推敲」の必要があ

る訳で、文字どおり踵骨彫身の苦

心がなくてはなりません。完成し

た一句となるまでには必然的に型

態づける表現形式も整備されなく

てはなりません。私は川柳塔に顔

を並べていられる方々の句に接し

一句一句を舌に乗せてゆつくり味

覚を喜ばせたのだが、其の中に棘

にも似た痛い刺戟があつて甘味に

陶酔するのを妨げるものがありま

す。それが一つには表現形式に依

るものであることに気付くのであ

ります。それも茲では専ら仮名遣

い法にのみ関係するのであります

が、新仮名遣い法に統一せられた

今日に於ても、旧仮名遣いになじ

んでいる人たちが正しい文法的仮

名遣いに依ること、こんな短詩

形では或程度自由ではありましょ

う。然し全一人がその場その時で

新旧両刀使いであつたり、全一選

者の選句に(選者自らの句にも)

は違ひ ○笑はせる ○かと言

わす

三、えとへ

○甘える ○植えに行く ○病

院さへ ○教へて貰う ○思え

ど ○目で迎え ○道問へば

四、うとふ

○けむたいという ○おんぶし

て貰う ○酔ふて居り ○財布

の頃思ふ ○モク拾ふ ○たと

言ふに ○徳用というので

○僕といふ娘 ○身勝手いふ

客

五、づとず

○まだ落ちづ ○云ふて来ず

六、ようとやう

○やうに逃げ ○やうに大事が

り

私はせんさくすることを止めて

一例をあげたのですが、これを新

仮名遣いを使用している新聞社の

論説に比例すれば

○違ひない ○これに従い

○いわれる ○行われる ○見

舞われる ○思われぬ ○い

えることもある ○議会筋の伝

える ○考えれば ○そいう

はず ○思うのは早計であるう

○不安が残るようでは、

などでありませう。川柳には川柳慣

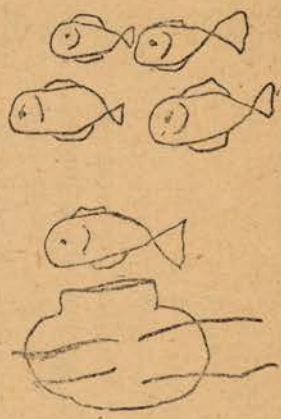
習の用語や手法があるに違ひない

ことと思ひます。新参の私の為

に

よき助言を頂けるよう鶴首してい

ます。(昭和二八・六・一九)



# 勤務医と走り医

—柳川の状舞見中暑—  
北川 春 巢

年賀状や暑中見舞のはがきを出すことを、虚礼だとか何とか云つて、反対する人もありますが、わたくしは賛成です。平素は何かと取紛れてたよりも出来ない人、そしてこれと云つて特別の用事は無いが、思い出すことは楽しい、と云うような人が誰にでもあるものです。そう云う人へは何かのチャンスがなければ、たよりに書くこともないのです。年賀状や暑中見舞状をそんな人達へ送つて安否を問ひ、こちらの健在を知らせると云うことは、意義のあることではないでしょうか。

ところが年賀状には、年頭の所感だとか、勸題だとかの句を書いて寄こす人が多いようですが、暑中見舞状に句を書いて寄こす人は比較的少ない。そこで私は暑中見舞に句を書くことを試みました。はじめは川柳人にだけ書いていたのですが、

がどうも印刷の寸前に作句するの、路郎先生に選をして頂く間もなく、まづくて川柳人には笑われそうなので、今年には川柳人宛には句を書かず、一般の友人関係のぶんにのみ句を書きました。句はこちらが達者で居ると云うこと、暑さで困っていること、を云つて、こちらの生活の一端を詠つた積りだつたのですが、どう云うものかこれが意外の反響を呼んで、今迄川柳など作らなかつた人達からの返信にも、にわか柳人になつたような様子で、川柳を書いて来まして、面白く感じ、こゝにその二、三を紹介したいと思います。なお、わたくしの書いてやつた句が分つていた方が、も一つ面白味が多いように思いますので、先ずわたくしの句を記すことにします。わたくしの句から見て医者仲間からの反響が多かつたのも尤も

と思われましよう。  
勤務医も診断書ほしい曇さなり  
(春 巢)  
先ず開業医A先生は、川柳も相当なものになつたね、とほめてくれました。俳人開業医のB先生は返信に俳句を書いてくれました。話はわき道へそれますが、川柳では暑中見舞には、暑くて困ると云うようなことを云いたい気がしますが、が俳句の方では、涼しい景色を描写して、涼味を与えたいと思ふらしいです。柳人と俳人との考え方の違いでしょうか。B先生の俳句を左に記して見ます。  
瀧の茶屋しぶきに堅く閉したる  
雨の瀧舞風のごと樹々ゆする  
濼々と瀧壺見えず煙りまり  
次はにわか柳人のC先生、先生は鉄道に奉職していた時のわたくしの大先輩で、短歌や俳句は句集まで出版しておられる方です。早速と返信を下さつて、  
走り醫者も診断書ほしい曇さなり  
と記され、「走り医者」は「勤務医」にくらべると三倍位苦しいです。と御体験を教えてくださいました。先生は退官後開業して居られます。

次は矢張り鉄道時代の先輩D先生、D先生は歌人で現在やはり開業中である立派な歌も詠んで居られますが、にわか柳人ぶりの左の句にも多少短歌的な表現の匂いがあるようです。  
ストもせずボーナスもなき衝醫  
肋骨がキリストに似てゐる瘦せてゐる



## 野介 逝く

▲川柳評論家として知られていた野介・大西卯之助氏が七月十三日午前七時十分、腸閉塞のため鳥瀉病院で亡くなられたことは寔に痛惜に堪えない。  
▲大西卯之助氏は明治三十五年九月八日、大阪市南区瓦屋町二番町五〇番地に卯三郎氏長男として出生、昭和十五年七月十二日フタバカップ株式会社に入社、その後専務取締役となり業務に精励されていたが昨年十二月病を得て鳥瀉病院に入院、手術後小康を得たので五月十日退院され、自宅阿倍野区晴明通一丁目四一で静養されていたが七月に入り病いにわかにあらたまり遂に幽明境を異にされるに至つた。翌十五日午後二時から社葬で告別が執行され我社の麻生路郎主幹、詩人小野十三郎氏、中島生々庵氏等の弔詞があつた。行年

### 野介句抄

の作品を詠んでいるところを見ると、既に二年も前に死の影がひそんでいたように思われる。左に「川柳雑誌」に発表された作品から一部を採録し氏の風格を偲ぶこととする。  
われを焼く煙りはさぞや蒼白し  
梯子酒我が淋びしさの果てしなし  
五一歳。釈大信。遺族はきく子夫人と三児。  
▲氏は資性寡黙であるが明敏、無神論者であつたが、友情に富んでいた。古くから詩をよくし、詩集数冊を刊行している。川柳は寡作の方であつたが、昭和廿三年八月から川柳不朽洞会に入り、川柳評論家として名をなしていた。「川柳雑誌」の昭和廿八年一月号に執筆した「川柳に於けるデフォルムと云うこと」が絶筆となつた。

次はわたくしと同じクラスだった君。彼は大学卒業後ずつと象牙の塔の中に居たのですが、極く最近大阪の近郊で開業、一度その開業ぶりを見に来てくれと云うので行きたく思っています。残念乍ら未だその意を得ておりません。然し返信に認められた左のにわか作りの川柳によつて、その活躍ぶりが眼に見えるようです。彼は生れて初めて句を作つたと云っています。

開業醫仮病を使う暑さかな  
氷喰つて下痢して寝たいこの暑さ

この句の註に曰く、これを診させられる馬鹿らしき！と。一般人には氷を喰つて下痢をし寝込む自由があるが、医者にはその自由さもなく、且つ往診を求められた場合には応招の義務がある。何と馬鹿らしいではないかとの意です。

往診料倍にしたいよこの暑さ  
往診料は片道半里以内は五点的きまり、一点半は十二円五十銭だから、従つて片道半里以内の往診料は十二円五十銭掛ける五。

勤務醫をうらやむ午後の暑さなり  
今から一里余りの所へ往診に出かけると書いてあります。

税務所に追いかけられる暑さなり  
税務所で涼しくなりぬこの暑さ

開業医の方が勤務医より三倍位つらい、と先に先生が教えて下さいましたが、その上開業医は税務所にいじめられる、とよく聞きます。然し勤務医（だけでなく、全サラリーマン）の税金の方が実は重税である由です。

開業医は以上のように、つらいことはかりを訴えて来ていますが訴えることによつて一服の清涼剤になつたことを、わたくしは疑いません。所が又勤務医の方は楽天的な方が多いでしょう。鉄道で同僚だつた下君。

月給でビールが飲める世とはな

と、処女作と銘打つて、我が世を謳歌していられます。然しビールが飲めると云つても、その量に至つては勤務医は、開業医の比ではないことは間違いありません。今迄飲めなかつたのが、多少飲めるようになったと云う意味であると思ひます。つまり勤務医の頭と開業医の頭とは、根本的に違つた所があるようにわたくしには思われなりました。この違いはあながち暑さのせいだけではないように思ひます。

最後にもう一人勤務医の方の見本、君、彼もわたくしと同クラスで、現在某病院の院長格ですがこの病院は私立の病院で他に院主

が居ると云う身分です。予防衣を脱いで廻診したくなり冷房の病院ほしい勤務醫者の二句を書いて寄こしました。全く同感で、冷房は我々勤務医の夢ですが、近頃「冷房病」と云うことが云われていることも、医者は忘れるわけには行きますまい。以上わたくしはわたくしの貧しい一句が同業諸先生に一服の清涼剤となり得たであらうことを返信によつて知つたことを喜びながら川柳人に御紹介したいと思ひます。

川柳雑誌

バックナンバード御入用の方は往復ハガキで在庫の有無御問合せ下さい。

**アサヒビール**  
いつでもどこでも  
**三ツ矢サイダー**



ユダ思ふ日よバイブルの手に重し  
言ひ勝つて唇さむきシガレット  
わが影を懐いてゴウゴウ貨車去りぬ  
（経営労働者（三句））

税務署を交じへぬ酒のうまいこと  
妥協して帰り烈しく妻しかる  
手形手形外では春が馳足だ  
おつちよこちよいも社長の三号知らなんだ  
名案の何所か一本釘はづれ  
七轉びころんだまゝで棺に入り  
紙もよく刷なつかしく初版なり  
割勘へ先輩少し余計出し  
黙々とした手酌へ妓すけに来る  
親子の逆立つ曲馬あわれなり  
欲情を見抜いて三味の音を締める  
折詰の鯛はいつすん縮こまり  
パチンコを出て男娼につきあたり  
苦の種の阿呆に買ったランドセル  
ゼニ貸せの話へ時計長く打ち  
たゞき賣り金のないのに取巻かれ  
淡々としてパトロンの別れよう  
終電に忘れてからのノーハット  
愛は愛パンはパンなる別れした  
死をみつめて光一箱空にした  
燃える燃える或日のぼくはネコに似る  
竹のごとくやつれてもなほ主イエスよ  
つきつめたこの娘のおもひまぶしいよ  
悪魔ふと尻尾のないを淋しがり  
國禁の書に共鳴の若さよし



路郎選

検問に折角の酔醒めちまい 広島県 黒本 苦泉  
 原稿の賣れる日を妻当にせず 同  
 美しいだけに哀れな脳異状 同  
 盛り直すうちにイチゴは腐りかけ 同  
 一と山にされるキウリのどれもも 同  
 淋しさがこんな男と再婚し 同  
 さあ殺せ〜が何時か寝てしま 同  
 八百長の喧嘩へ姑氣が直り 同  
 平社員すまない様な肥りよう 大阪市 小宮山凡太郎  
 里帰りちよつびり他人に扱はれ 同  
 こせ〜と昔苦勞をした社長 同  
 藤棚のところで彼女の氣をそこね 同  
 重役がいるに甘えた妻の声 同  
 傘借りて来れば荷となる夏の雨 同  
 質へ行くカメラ肩へは掛けず持ち 大和 小川 学  
 會計の椅子へ身内を置くささめ 高田市  
 空想にビフテキ浮ぶほど貧し 同  
 全集は手あかがつかずして並び 同  
 資本家ともなれば倫理もつい忘れ 同  
 自由の名に於いて立入禁止ふえ 同  
 大げさな悲鳴女給のテクニツク 貝塚市 宮本 甲馬  
 朋輩へチップの高はごまかせず 同  
 なぜこうも五十の男はあけすけか 同  
 宴会のくづれ大阪弁ばかり 同  
 その氣にさえなれば税吏家は建ち 同

騙されていても奥さん稼業よし 同  
 碁仇の家え和尚はひつかり 和歌山市 浅川 桑南  
 出来た句を忘れて帰る貰い風呂 同  
 お背中を流す羨けに恐縮し 同  
 碁仇の膝になつた子に困り 同  
 敗退のナインも着けた守り札 同  
 親父まだ諾と言はないビール注ぐ 大和 岩垣 日本村  
 標準語夕飯となり止めちまい 高田市  
 観世音男哀れむ御姿 同  
 青写真ビルも二つに割つて見せ 同  
 月光で見る断崖は夏のもの 同  
 べんちやらへ頷く鼻が脂ぎり 吹田市 梶川 蘇堂  
 父と子とシヤワーへ暫し目ををぎ 同  
 バンガロー去年の夜の事にふれ 同  
 補回戦ソーダ水まで賣り切れる 同  
 たかが千株成り行きで賣つて来い 同  
 誘惑に勝つた話は妻にする 東京都 石井 高志  
 謂うなれば酒飲む爲の人生さ 同  
 羨まし恋が女の全てとこは 同  
 避妊薬すゝめた方が妊娠し 同  
 奥さんのあるなしやたら聞きたがり 同  
 何の役も理想主義者の氣に入らず 石川県 松本 文太  
 隣もう寝てゐるらしい春の雨 同  
 遺骨抱く軽さに悔ゆる日のありし 同  
 遮断器へ自轉車みんな日に当り 同  
 政党にかゝわりのない鉄の光沢 同  
 大社さん遷宮で寄附焼けて寄附 出雲市 佐藤 まさる  
 大社さん火難除お札賣るに照れ 同  
 病む床に解雇の便り読み返し 同  
 あの道はいつか来た道演習地 同

所變れば

藤本 茶々

言葉づかいというものは随分面白い印象を受けるものだ。  
 「あのね今あのおばさまにね、これいたゞいたの」  
 「あらいいわね私もあとで読ませてね」  
 と可愛い、子供の声をする。何気なく振り返つて驚いた。声の調子言葉使といふ、どこの良家の子供だらうと思つていたに、色目もわからない服、この寒いのに靴下なしで、横の破れた運動靴、もじや〜とした頭の女の子が二人。  
 一体に東京は言葉がよいので今迄乱雑な方言を聞き馴れ、使い馴れて来た私には一寸奇異な感じがする。  
 「アラツ……」だなんて言う顔じやないやとよく主人が話すが全くそんな感じの人が多いのもおかしい。  
 よほ〜の乞食のようなおじいさんに  
 「なに言つてやんだい、なつちやいねえや」とあびせられると聞いた方だとまどつてしまふ。ポロ／＼の女の子にしろ、このおじいさんにしろ、服装や態度からすると、田舎の「だんべい」言葉がむしろ似つかわしい。





ボーナスへパチンコの釘曲けて待ち いたすらをして呉れる日を妻さま 米子市	同	小西 雄々	アームインアームおっむも薄いなり パパとよぶ女が俺を若くする 酒の勢どん／＼と持つて来い 今治市	同	長野 文庫
里帰りする口実によい田植 ゴム長を履く靴下をきめておき 同	同	大塚美能留	これでもかどうだ／＼と支那料理 待合で酒酌み交す舞台裏 実は生理的要求後妻欲し 同	同	津田表太楼
貧しさは医者を呼ぶにもためら 岡山県	同	吾郷 玲人	郷愁は汽車の硝子を指で拭き 岡山市	同	久保 和友
一級酒ばかり出ている前祝ひ 何もかも口へ持つてく子の育ち 同	同	大和 和	どの妓にも一應惚れる良い社長 一号は賢婦二号はちつと抜け 思春期は女生に草失など飛ばし 還暦とはあの人も若いこと若い 滋賀県	同	同
剣劇の女相手を待つ姿 大阪府	同	中谷川太郎	貧乏が板についてきたバット 田舎だけは遠慮をした いさう愚妻 夏祭こゝにも裸の女いる 子の機嫌社長手帳の唄を出し 姫路市	同	難波 愁夢
東京へ恋を語つた三通話 俗人と言はれる人の腰低く 通俗の作家箱根で書きなぐり 大は小兼ねるが大きすぎる妻 高田市	同	石川ひさみ	妻のみでなく藝者迄お父ちゃん 押賣さ知らずエプロン外して出 恋心読むのでもない本を借り 困窮者の統計だけは政府とる 姫路市	同	小畑自由期
病院の得意先とは恐れ入り 病院の得意先とは恐れ入り 正しいが故に妾の娘は悲し 口説かせるだけ口説かしては 氣 男さかしや捨ててやつた とうそがいて 同	同	森本 花子	五人の兒残して耐に討たれたり パチンコを俵に負けておごらされ さあ噂始めましょうと涼み台 高田市	同	戸田 悦子
土方今日背廣で恋がして見たく クス／＼と笑ひ女中は口説かせる 月見草だけが咲いてた水害地 学友の智恵を集めて母を説き トラックの重さに耐へた名なし草 米子市	同	勝田 正郎	朝寝してサンダル汚す道を抜け 肩ごしにのぞけば香具師の手が白 い豊中市	同	加納山茶花
イラ／＼とかん高くを基地の子ら 基地の子が使う言葉もパンパン語 地味なもの嫌いなち基地の子ら 口実が浮ばぬまゝの終電車 大阪市	同	若本多久志	緋帯を巻さえ見得の若さにて 世渡りに事実曲げるが法となり 物云うに口をゆがめるニヒリスト 同	同	同
病床の夫にすまぬ紅をつけ	同		実の子に見せて近所に氣を使い 大阪市	同	永田都詩子

自分の言葉使いが如何に粗雑なものであるかを、時々思い知らされる事があるが、これも生活の度合にふさわしくしなければならぬらしい。さあまず言葉は舌にもつれるようで好きではないがどうやらそれ程の階級にはなれそうもないから先ずは安心。

アクセントも一度浸み込んだものは、なかなか抜けないものとみえ、私が小さい時から殆んど育つた大阪弁のアクセントは、大阪の土地を離れてもう十年近くになるのに、いまだに残っているとみえて、自分ではアカマケのした江戸ツ子弁だと思つて得意になつていると、初めて会つた人からも、奥様は大阪の方ですかとベシヤンコにされてしまう。音痴の者はその土地の言葉になか／＼なれないと言ふ事を聞くけれどそんなものだろうか。成る程私の知つてゐる人も音痴で故郷の言葉をふり廻して平氣でゐるし、私も音痴という事になつてゐる。

美顔水  
三  
谷野天徳



やりくりには馴れてゐる妻強し  
 染め直し悲しや指に紅にじむ  
 褪せた服染める暮しに夏がくる  
 駅弁もみんな食べたご母達者 大和 高田市  
 番傘を貸す奥さんが機嫌して  
 西陣は冬の支度のドロ絵具  
 ガムでも噛み給え居眠り議員殿 神戸市  
 ネクタイが賣れなうて氣付く初夏  
 氣の早い蚊には一言なかるべき  
 うちのひと浮氣し茶屋が出来 倉敷市  
 通りのいゝ煙管を隠居自慢にし  
 プロポーズ映画の仕草でやつての  
 台風より陳情團を避けたがり 鳥取市  
 医者へ行かうか畑へ行かうか田植え前  
 内灘も弾が飛んだら静まつた  
 妻の留守四疊半でも廣過ぎる 大阪市  
 白帆から見える神戸の街の筋  
 先生の浴衣と阿倍野橋で会い  
 死刑囚にも初恋の過去があり 愛媛県  
 釘一本抜く先生は取りまかれ  
 もう死んでいや懸賞尋ね人  
 炊事婦の役得毒味でございませ 岡山県  
 初恋のひとだと言え年になり  
 色慾は名譽や顔と別に持ち  
 インテリでメガネの似合ふ女です 大阪市  
 早乙女の香り包んだ手甲脚絆  
 寡婦今も未來へ大きな望持ち  
 倦怠期など言ふ程金もなく 貝塚市  
 二号会とは色街のことでした  
 ナンバーワン結局金に身を任かし  
 月見草しのび泣くよな恋もなく 貝塚市

ハテ誰の忘れものかと煽る  
 この次の予定は水害視察なり  
 退職金もろたらなど父の老け 玉野市  
 貧乏はしてもと妻は負けていす  
 カートの中の揉め事氣にかゝり  
 此処へこう押せと始末書書いて  
 あの顔で養子を選つてゐるさうな  
 又どうぞ言われて退る歌謡曲  
 タクシーで行く程でない距離だった  
 ものいわぬ先に手が出る性悲し  
 儀礼的な訪問留守でもかまわない  
 苦学生あわれ立ち読みうまくなり  
 くゝられてある講義録いつうれる  
 社用より私用氣の利く秘書であり  
 方角の事へ口ばし入れる母 京都市  
 最う嘘がうつか言へぬ子はもち  
 すだれから覗く街道砂ぼこり  
 また要るか知らともんべん 石川県  
 継母と知つたは成人式の後  
 煙突が無駄に立つてるストライキ  
 オフィスとバーと務めてゐる 大和 高田市  
 やけ酒を飲めばあきらめられる  
 今日からは清水一家となるお酒  
 親分も案外内で恐妻家 福岡市  
 魚同志君も瘦せた水族館  
 清掃夫昔の儘の金入歯  
 朝風呂へ邪恋の乳房ジツつけ 岡山県  
 囁きへ螢えんりよもなくごまり  
 曲り角数えてもどる族の宿  
 うちもこりたんじや貸して 倉敷市  
 職工かど笑つた奴が人夫に来  
 作業服着ても社長と言ふタイブ 大阪市

ナマリ(生節のこと)イタ(かまぼこのこと)ワラサ(はまちのこと)シラタキ(糸こんにやくのこと)とシラスボシ(ちりめんじやこのこと)シメサバ(生ずしのこと)等々...まだ調べれば沢山あるだろう。物の名称の違ひことは土地が変れば当然のことながら、日常の買物に馴れない間は恥をかいたり、とまどつたり、先方を面喰わしたり、とんだ茶番劇を演ずるうちの女中など井の中の蛙で産れて初めて大都会へ出たもので今まで自分の家で通用する事しか知らなかつたものだから時々笑われて泣いて帰ることがある。  
 それにしてもわずか三百里、時間にして急行で十四時間半岡山から離れると、同じ日本に居ながらこんなにも通じない事の多いものかと今更感歎する。  
 さて今晩は、ワラサの刺身にナマリと生しいだけの煮付でもするとしようかな。

読み難い名

長野文庫

ながい、にふう(永井荷風)や  
 さとみ、じゆん(里見淳)やこも  
 ざわ、かん(子母沢寛)には驚か  
 ないが、ほそく、りいちろうには  
 一寸驚いた。たつた今一人の青年  
 が店内に入つて来て暫くあつち、



夕立へ祭衣裳が逃げまい 同 奈良市 絹下 南天  
 身内だけ寄つて重役会となり 同 村上 旭童  
 母と言ふ名も持つている娼婦 同 村上 旭童  
 便り書くところあり田植え終し夜 同 村上 旭童  
 何もかも面白うなうてねえ 同 村上 旭童  
 罹災してこれも試験と思えども 同 熊本市 高野 宵草  
 一代の不覚句帳が流れ去り 同 同 宵草  
 この皿の手料理夏のものになり 同 岡山県 穂北ベン郎  
 新緑の明るさで見える寝てる顔 同 同 穂北ベン郎  
 闘犬のように候補があつかはれ 同 赤穂市 川西 去水  
 パチンコに人老い易し老い易し 同 同 去水  
 病人が指図している犬の小屋 同 岡山県 美野百合子  
 尼僧にでもなるかと尼像見てたり 同 同 美野百合子  
 なめらかな声で贗作褒めて去に 同 大阪市 藤村 梨花  
 櫛の齒も欠けて不遇の髪を梳き 同 同 藤村 梨花  
 自宅からの弁当課長に取つがれ 同 倉敷市 岡野風の子  
 豨狩りラブシーンなどを見てかへり 同 同 岡野風の子  
 押賣をこつちめ妻に見直され 同 出雲市 久家代仕男  
 押賣が隣も買わぬ音で閉め 同 同 久家代仕男  
 辻褄の合はぬ道理の帳を裂き 同 出雲市 日野加壽緒  
 座席券女は顔で先づ貰ひ 同 同 日野加壽緒  
 アドバルンまだ見えてるピクニック 同 大阪市 丹波 太路  
 商才が有つて住職閑がなし 同 同 丹波 太路  
 末席が一口いいたいところをつき 同 岡山県 佐々部 彌生  
 高とびが夕刊買えば吾が写真 同 同 佐々部 彌生  
 七月の陽へ井戸水の溢れよう 同 岡崎市 稻吉 佳唱  
 耳たぶを染めて團扇をもてあそび 同 同 稻吉 佳唱  
 女の子顔で噴嘩をして帰り 同 岡山県 岩崎 君代  
 シヤボン玉猫の頭で一つ消え 同 同 岩崎 君代  
 その割りにあてなはれ従兄弟なり 同 愛媛県 鳥井 川島  
 ナメクジの葉に在る時は詩は詠まれ 同 同 鳥井 川島

清く生き男の様な未亡人 出雲市 森 山莊  
 花の中にうづくまつてる朝の幸 同 同 森 山莊  
 押花もあつて乙女の豆手帳 大阪市 安井 久子  
 学窓を出て香水の名もおぼへ 同 同 安井 久子  
 儲けたと言はず植木を集めてる 岡山県 岡本 薫翠  
 植木だけ芽をふいてゐる斜陽邸 同 同 岡本 薫翠  
 やさもちと色氣は別なものらしい 大阪市 不二田三夫  
 お嫁ぐらい自由は王子さま 同 同 不二田三夫  
 作者今一人殺して煙草喫い 神戸市 岩田 一夜  
 運轉手の妻眠られぬ夜を祈り 同 同 岩田 一夜  
 涼しそな女患の室は覗かれる 貝塚市 小田 柳叟  
 録音班海女の惚氣も少し入れ 同 同 小田 柳叟  
 絶安の友へ螢を摘まんで来 貝塚市 小島さざす  
 病人のさまぐれ犬をもう捨てた 同 同 小島さざす  
 太陽を神とあがめし母老ひぬ 倉敷市 安原 秀魁  
 保安隊偽装して青田の道を行く 同 同 安原 秀魁  
 縫い賃を月に積もつて淋しがり 岡山県 柁村 鳩守  
 損得を言つて怠けている夫婦 同 同 柁村 鳩守  
 三十にどどいて女らしくなり 大和 戸田 嘉一  
 和歌山県下水書  
 見おさめにならぬ知らず家を逃げ 同 同 戸田 嘉一  
 これ程に子供の居つた日曜日 大阪市 清水 望峰  
 乳呑子に夫へのぐち聞かしてる 同 同 清水 望峰  
 瓜の蔓所詮は瓜の子に育ち 京都市 松下京一樓  
 母やつと母の身になる涼み台 同 同 松下京一樓  
 氣軽うに次男三男裸で出愛知県 岩川 寛虚  
 濡れタオル妻にまかせて宿を落ち 同 同 岩川 寛虚  
 近道をして来た靴だなど思い 岡山県 小原 宇柳  
 ストリップまたあの禿が伸びり 同 同 小原 宇柳  
 もう稲を青で賣つてる不倅 岡山県 岡田 青果  
 就職の靴は宵から磨かれる 同 同 岡田 青果  
 お嬢ちゃん女中の愛で育てられ 岡山市 斎藤 一心

こつちを眺めて居たが、私の坐つて居る後の棚に置いてある哲学関係の本を指して『その「ほそくりいちろう」の本を一寸見せて呉れ』との言葉に一瞬何のことか分らなかつたが、それは帆足理一郎著哲学と人生を見せ呉れ、と分つて妙な気持がした。歴つきとした日本人で而も哲学の本を探して居る人が「ほそくりいちろう」と云うトンチンカンに呆れ返つたのである。これまで「ほたる、りいちろう」「ほあし、りいちろう」などは聞いたことがあるが「ほそくりいちろう」は生れて初めてである。よくも読んだりと興心する次第である。

ところで地名や人名には想像のつかぬ場合があるが、常識として知つて置かねばならぬ人物の名前を誤るとその人の教養の程度

**瓶の銀山**

大阪市長浜區西通一丁目四番  
 山銀硝子株式会社  
 電話編川四四七番



夏瘦に期待をよせる娘なり  
 老妻はつとめを了えた様に病み 大阪府 森本黒天子  
 三角を丸をゆがんだ儘教え  
 貧乏の続きも僕で三代目 大阪市 中江破天荒  
 先生の家を探せば二階借り  
 商魂は只やる様なピラを出し 大阪市 深見雅樂太  
 流し眼に女の熟れを匂わされ  
 月ほめに出たら男にからかわれ 大阪府 高橋 幸子  
 新婚の設計してた人を捨て  
 儲かるで出ますと代議士言はなんだ 岡山県 池田 古心  
 ラヂオかけ将棋を差しても喰へる店  
 法網え雑魚ばかりが引かゝり 兵庫県 吉原 紅月  
 親類として紋付の羽織を着  
 常に見ぬ艶氣蚊帳吊る妻に見る 滋賀県 土守トシ坊  
 百姓の子は百姓とあきらめて  
 身の不運かこつうなじの細いこと 岡山県 春名 秋芳  
 我儘が魅力に見える程に惚れ  
 扇子持ち替えて課長は判を押し 岡山市 宗高ハツ茶  
 ライバルの無事失望に似た氣持  
 パチンコ屋を道場破り程儲け 宮崎市 野口卯之助  
 寄れ〜と云ふから寄れ茶も出さず  
 ほよせたコケシに二号少しやき 大阪市 野田 勝己  
 舞踊かどのぞけば天理教だつた  
 個性みなあらわに出してまごまご 岡山県 小果 鳴子  
 ネクタイをきつちりして野暮さ  
 神風を思い出させるように降り 熊本県 水本 正風  
 子の願ひ直ぐに聞かれぬ暮し向き 大阪市 西川 恵風  
 農繁期牛はのんびり野草食べ 大阪市 中谷ハナ子  
 叱られていた頃ばかり懐しみ 大阪市 池戸 桃村  
 麻雀をしたとも書かず異状なし 吹田市 橋本 幸男

東京で覚えて来たはダンスだけ 石川県 杉浦 酔羊  
 農業でストが出来ぬを口惜がり 津山市 菱川 正美  
 抽出しへ晝のメザシの二三びき 岡山県 國正兼比羅  
 釣池に一日過すだけに老け 大阪市 兒島與呂志  
 看板に偽りはなし呈薄謝 大阪市 安井 蜂呂  
 履歴書の字のまづいのが課長の子 貝塚市 辻 圭 水  
 大正の恋を育てた月見草 広島県 山田 桂角  
 多数決よいかとばかりとはゆかず 貝塚市 高崎 雄声  
 引揚の兄弟そろひあいうえお 和歌山県 今井那智恵  
 父は病み僕は縣下の優良兒 和歌山県 楠本 柳生  
 眠られぬ蛙の中の療養所 鳥取県 新竹しげる  
 無意識に故郷の方観てたビルの上 貝塚市 新城於久良  
 代々の土地を守つて食へもせず 松江市 原 章 坊  
 金次第はつきり示す差入屋 岡山県 沖 一 糸  
 賢妻はなめられてる様で居る 鳥取市 岩田天保錢  
 四十にもなつて嬉しい里帰り 岡山県 多田野保子  
 詰將棋解いて初めて飯にする 和歌山県 谷口喜久治  
 貫録が昌違いで見下げられ 岡山県 松村 怠坊  
 性分ですと男余りにかたくなな 大阪市 神谷凡九郎  
 よれ〜の十円札を身に較べ 高知市 岡本 元馬  
 袈裟を着てまごまごのつく若い僧 東京都 寺本 島人  
 呉服屋の軒先え来たたゞき賣り 愛媛県 高木 不朽  
 社長又秘書にホルモン削買わせ 岡山県 梶尾 節子  
 招かれる厚意にそむく天のじやく 石川県 小山かづ子  
 釣つて来た因果自分で火もおこし 和歌山県 岸本 木魚  
 煙突の数にたまげる二十年 石川県 桑山 だよ  
 病床の妻へミルクをそつと置き 岡山県 南部ひでを  
 パチンコのチンチャラ〜が耳に 石川県 栗山 桃園

が分つて一寸淋しい。整、突、伝  
 晃、新など一字名の文人をセイと  
 かジツとかデンとか云うのは許せ  
 るとしても、よしい、ゆう(吉井  
 勇)つばい、えい(壺井栄)あり  
 たか、がん(有高殿)などは、い  
 さむ、さかえ、いわおと読み度  
 い。殆んどの人が間違えるのが藤  
 沢桓夫(ふじさわ、たけお)横溝  
 正史(よこみぞ、せいし)角田喜久  
 雄(つのだ、きくお)である。二  
 つねお、まさし、かくだ」と読む  
 人が多い。  
 家寓の飼い方と云う本を著して  
 居る花鳥得二と云う人は著作を連  
 想して「はなどり」とよく云う人  
 があるが、この方がピッタリする  
 名前であろう。向坂逸郎、井伏鱒  
 二、城昌幸、中沢聖夫、池田宣政  
 諸氏も迷わせる方だし、若杉慧、  
 堀寿子、三石巖諸氏も一寸判じ難  
 い。間違ひそう間違ひわないのが  
 西条八十、佐藤垢石、大仏次郎、  
 葛西善藏氏等である。又宗教育家や  
 詩人にも專精、伯耆、連胤、竜岳忽  
 滑谷快天或は御風、泣重など変つ  
 た名がある。法律家にも随分変つ  
 た人が居る。元本誌客員だつた末  
 広徹太郎氏の外、我妻榮、蜷川新、  
 於得不二雄、広悟嘉雄、安平政  
 吉氏等も変つて居るが、烏賀陽然  
 良(うらがや、ねんりょう)は最も  
 変つて居る。

# 一路集

## 注文

清水白柳子選

注文の通つた頃に銚子空き 南天  
 先生に注文がある子供自治 爽信  
 注文に名人の顔不愛想 芳泉  
 足代もない注文も礼を言い 一瓢  
 手で合図常連らしく注文し 十九平  
 注文をしてからメニユー読直し 直人  
 注文のわりにみなりが汚なすぎ 方大地  
 子の注文はいくは返事文 風の子  
 メニユーから一番安いのを通し 鉄児  
 集金と別、注文へ手帖出し 誠史  
 注文をしてから借りるトイレット 同  
 銭金を言はぬ注文怖くなり 葉光  
 注文もなく外交の靴は減り 満年  
 日曜は妻の注文だけで行き 太路  
 サービスに負けて注文して帰り トシ坊  
 注文が大げさすぎて疑われ 喜久治  
 注文品係給日まで持つてこつ 秋穂  
 おこられる方がメニユーを読んで見る 光郎  
 何時でも結構です注文とておき 賀峰  
 出前持道で注文きいて来る 芳花  
 赤字覚悟で注文を引受る 鮎美  
 注文を取る番頭の腰になり 山雨楼  
 注文の通りにすれば金が要り 正郎

注文書へ判こが十も要る役所 芳仙  
 注文はおろか返本続くなり 桂角  
 なんとかなると注文だけしとき 美秋  
 酔漢が注文通り右へ折れ 四苦峯  
 ワンマンへしたい注文数知れず 文郷  
 払つてもくれず注文ばかり来る 天信  
 米兵の注文時差しが必要 甲馬  
 佳さんさん注文つけて任せます 同  
 催促のない注文はほつとかれ 悦子  
 注文を聞いてる人が出ています 摩太郎  
 詭えて帰れば妻が買うて居り 代仕男  
 注文を取る二本目の煙草つけ 白溪子  
 注文に行つた兎何か貰うて来 天信  
 注文は言い出したのに皆決め ゆずる  
 人・注文は言い出したのに皆決め 甲馬  
 大阪の注文急ぐものばかり 木魚  
 天・注文の靴に囁かれて宿につき

## クイズ

弘津柳慶選

ダイヤルを次のクイズに廻し 同  
 クイズ今美人と見える司会ぶり 南天  
 あと一問はら／＼さきよつと当て 芳泉  
 広告のクイズにつられて注文し 良坊  
 世智辛くクイズに出ようと思ひ 実信  
 忘れてた頃ヒクイズのハガキ来る 麻由美  
 クイズだけ家族みんな気がわるい 木魚  
 司会者の手加減クイズをあてます 白溪子  
 三問中二問のクイズおしがられ 摩太郎  
 観衆へ自信崩れて来たクイズ 鉄児  
 クイズ欄子のない夫婦むきになり 惠二朗

退屈な学課へクイズ廻つて来 同  
 好調のクイズいよ／＼第五問 桂角  
 気の弱いクイズ二問で止めて去に 同  
 悩ませて心楽しむクイズ狂意坊  
 新聞の隅のクイズも見逃さず 芳仙  
 観客は拍手です／＼める第五問 雄々  
 留守番をヒヤ／＼させるクイズ 文郎  
 満場を湧かしてクイズの唄終る 光郎  
 クイズ狂僅かなヒント見逃さず 圭水  
 野次られて解けぬクイズが急込まれ 味平  
 クイズなどおもしろくないミラヂオ 保子  
 司会者もお株取られたクイズ客 雨季舟  
 本職よりクイズの方で名を博め 破天荒  
 御主人が聞いて下さるクイズ言ひ 賀峰  
 賞品は一々宣伝して渡し 山雨楼  
 謎々之病の床でい／＼答 悦子  
 当つたら名を云ひます云うクイズ 同  
 会場へお礼を云うて賞を受け 満年  
 スポンサークイズばかり／＼金かけ 喜久治  
 パチンコで儲けクイズでまた儲け 茶々  
 私でもあれなら知つてゐるクイズ 代仕男  
 新聞のクイズ解いてる事務は暇 正郎  
 クイズ聞く笑も洩れて恢復期 丁坊  
 女房はクイズで知性養われ 辰始  
 許婚者クイズと知らず連れられて 登志晴  
 風休みクイズマニアが話題出し 輝雄  
 頭より心臓の方で解答し 誠史  
 聴いて居ては／＼と思ふクイズなり 十九平  
 当つたら奢れクイズに智恵を借し 方大  
 一流の雑誌もクイズ無視出来ず 寛虚  
 ダイヤルを廻せば／＼もクイズなり

品質優良  
**タチカワペン先**  
 TACHIKAWA PEN  
 大阪市東区豊後町四八  
 立川商事株式会社



カワペン  
 カワゼム  
 カワ画  
 タチカワ  
 タチカワ  
 タチカワ

川柳雑誌社特製  
**柳箋**  
 投句用  
 一冊(五〇枚綴)三〇円  
 送料 八円

ワンヒントはクイズに薄く拍手 葉光  
 僕ならばズバリ当つてゐるクイズ 凡九郎  
 常識の程をクイズで噴はれる 呆声  
 常客未だあきもせずクイズ(書いて出し) 嘉一  
 スターの名子に聞きクイズの答が出 十九平  
 司会者の味なヒントも通じかね 高志  
 第三問は母が台所から答え 茶々  
 クイズ／＼民間放送芸がない 代仕男  
 主人・クイズ狂母の名前も借りて出し 三葉  
 懸賞のクイズ家族の智恵で出し 青柳  
 誰れにでも解けるクイズの広告欄



# 川柳江戸船饅頭

阿達義雄

船饅頭は深川井の堀の辺に出た三十二文の卑娼である。「岡場遊廓考」に、老人の話として、「船饅頭の一切と云ふは、永久橋の脇より乗りて漕ぎ出して大川へ出、中洲を廻りて、また元の永久橋に戻るを一切と定めたるよし、此の一巡り價三十二文。」といふ言葉引用し、其の舟付の場所として、行徳河岸・永久橋・永代橋・八丁堀稻荷橋の四ヶ所があげられてゐる。船饅頭について感心な話が、寛政の頃の町奉行根岸肥前守の見聞録である「耳袋」によつて傳へられてゐる。なか／＼面白い話であるから之を分り易くして記してみることにする。題は「賤妓発明にて加護ある事」とされてゐる。浜町河岸の箱崎近辺の河岸へ出で、船饅頭と言はれた船で情を賣る女があつた。之は至つて下賤の娼婦である。それは大晦日のことであつた。

下町辺の町家の若い者が主人の命によつて、賣懸金を取り集めて其の辺の河岸に通ひかゝつた。船の中から「おいで／＼」をやる女がある。此処を根城とする船饅頭である。若い者は酔狂のつもりで誘われるまゝ船に乗り込み、其の女と雲雨の交りをして立ち別れたのであつた。主人の店に大分近くなつて気がついて見ると、賣懸金を集めて入れて置いた財布がない。若い者は大いに驚いて、今日走り廻つた所を色々尋ねたけれども、全く行方が分らぬので、今はもう川へ身を投げるか首でも縊つて死ぬより外はないと覚悟を決めるに至つた。そして、その晩は主人の許に歸らず、一夜明けて元旦となつたが、矢張り思ひ切れず、あちこちどうするつきながら二日、三日と日を暮して了つた。四日の朝になり、「船饅頭の船の中へ落したのではなからうか」と気が附いたので早速河岸通りに行き、大晦日の夕方に乗つた船を尋ねた処、思ひがけなく其の女がひよつこり現れて来たので、先づ何もなかつた。様子をして其の船に乗り移つた。ゆつくり事情を話すつもりなのであつた。すると彼女は声をひそめて、「もしや貴方は大晦日に來られた方ではありませんか。きつとお忘れ物を捜して居られるのでせう。」と話しかけられ、若者は、如何にもかやう／＼の品を忘れ、自分の命も今日明日限りと歎き泣きながら話すと、女は「私も然うだと思つてゐました。其後毎晩お出でがあるかと待つてをりました。」と云つて財布を渡したのであつた。若者は嬉しさに飛び立つばかりの思ひで礼金を出す、女は其の中から、ほんの僅かばかりの金を受取つてあとは返し、何の札などに及びませうや。」といふ始末。それで女の名、親方の町処を聞いて、主人の許へ幾日振りかへ歸つたのである。主人の家でも大晦日以來、金を持つたまゝ歸らないので大騒ぎの処なのであつた若者は今迄の事情を悉くさげ出して話をし、「不思議

のことで、命が助つて歸りました。」と。例の財布に帳面を添へて渡したのであつた。金と帳面勘定を照し合せて見るに聊かの違ひもないので、主人も大いに驚き、「賤しい勤の身で斯くも正直の心のあるといふのは不思議と思はれる位だ。お前も最早家を持つても然るべき頃だ。」と、別に店を持たせ、前の船饅頭を請出して其の妻とさせたのであつた。其後、夫婦仲もよく、やがて相應の商人と成つたといふ話である。その妻が後々になつて語るには、「あの金は私が正直で返したのではありません。船饅頭の親方などは貪慾無道の者で、船饅頭などが、少しでも金を持つたと思れば、そのまゝ自分を打殺して了ふに違ひないと思ひました。考へて見れば貴方も此の金故に命にも拘ること、自分も貴方も此の金子故、却つて命を失ふことになつては、毎晩貴方のおいでになるのを待つて、親方には深く隠して置いた次第です。」と言つたといふ。

根岸肥前守は町奉行らしく、町々の巷談に耳を傾け、特に犯罪に関係しうな話に興味を感じて拾ひ集めてゐる

のは面白いことである。そして、右の話を「才発なる女也」と、浜町辺万年何某の物語りなり。」と結んでゐるから、單なる風説でなく實際あつた話と思われる。

安永二年板の「紫鹿子」によると、船饅頭の髪は風、衣裳着こなし、人柄は、大体に於て大津絵に似てをり、病氣にかゝつてゐた者が多かつたといふ。「寛天見聞記」にも「天明の末迄は大川中洲の脇永久橋の辺へ、舟饅頭とて小舟に棹さして岸へ寄せて往來の楫を引き、客來する時は漕ぎ出して、中洲を一廻りするを限

## 残暑御伺

### 大西迷窓

高知市追手筋五七  
入交試験所内

### 難波愁夢

事務所  
姫路市高尾町六二〇ノ一  
電話路一九四九・二九三五  
自宅  
姫路市定元町一三三  
電話路四一六七

熊本県菊池郡大津町  
西口如川

とて価三十二文也と、是等も夜鷹と同じく、瘡毒にて足腰の叶はぬ者多しといふ。」とあり、「柳多留」などの中にある句によつて見ると、

ぎうに手を引かれてびつこ舟に乗り  
(柳多留一二編)  
舟饅頭生洲夜たか野じめ也  
(柳多留四〇編)

成る程、舟饅頭は生洲に飼つて置き、必要に應じて料理する魚の様なもので、夜鷹は野放しに飼つて置き、時に應じて締め殺す生物に似てゐる。

おちよとは船まんちうに禁句也  
(柳多留三七編)

「おちよ」はお千代で船饅頭の別名で、船に「落ちよ」とは禁句だといふ意味である。

昔有名な船饅頭に、ぼちや〜のお千代といふのがあつたことから、船饅頭はお千代とも言はれた。

股火して寝る程お千代買ひこな  
(柳多留六編)

おちよ船苦を敷寝のかちまくら  
(柳多留四六編)  
不景気な晩とお千代は河岸をかへ  
(柳多留七〇編)

此の様を一片舎南龍作の草双紙に「……顔色あたかも大津絵のあねさまに等し、夏は蚊にせめられ、冬は行火となん云へる火鉢一つに寒風を凌いで、夜の更けるも厭はず、苦舟の中に苦海の勤め浅からぬ

こそ、これをや実に苦海の中の苦海と云ふべきものならんか。」と記してゐる。

饅頭は蕎麦に八文高く売り  
(柳多留五六編)

蕎麦は夜鷹蕎麦で夜鷹の句はし、饅頭は船饅頭で夜鷹の二十四文より八文多い。

猫を乗るのが一鞍三十二文  
(川傍柳三編)

公娼の狐に対して私娼の猫であらう。

浅妻に似たが三十二文なり  
(柳多留二九編)

お千代船は英一蝶の好んで描いた浅妻船によく似てゐたので此の句がある。一蝶は此の船を描いたので、五代將軍綱吉と愛妾お傳の方が、吹上の泉水で船中淫蕩に耽る処を諷刺したものとし、幕府に罪を得たと言はれてゐる。

浅妻の船で男を乗せはじめ  
(柳多留八〇編)

客迎ひ浅妻船に娘ぶん  
(九六編)

浅妻の舟にはうかか乗給ひ  
(一一七編)

朝妻の粗相一蝶船に乗り  
(一一一編)

「一蝶船に乗り」は一蝶の三宅島に流されたことを「うかか乗り給ひ」は將軍に対する諷刺他はお千代船を詠んでゐる様に思はれる。

船で売るまんぢうぼろで一奴  
(柳多留四一編)

なども、此の船饅頭を詠んだものである。



### 荒木哲水君のおもひ出

水谷 鮎美

昨年二月十七日に私の句集「心の燈」の出版記念句会を大阪の阿倍野王子神社で催しましたところ、麻生路郎先生をはじめ大阪柳界の主なる人々が多数参席下さつて幹事の豆秋羽骨而君は非常に喜んではりきつていました。其処へ哲水君はわざ／＼箕面の山に咲く紅樺を手折つて持参してくれました。紅樺が大好きな私を知っているからだつたのです。その時の私の選も「紅樺」でした。

哲水君は川柳雑誌「つぼんの情熱家」でした。川柳以外ではよく論じ、よく読んでいました。私との間はほんとうに明朗でした。これは川柳を深く信じていたからです。斗病生活に明け暮れた彼はそれからよく私の社の机を訪ねてくれ、時には寸鉄人を刺しては朗笑をのこして帰つてゆくのでした。

七年自身ごもる妻と春を呼ぶを提出して、その説明に「……とにかく七年目に来る児だ。どちらが生れてもいゝよと妻と話合つてゐる」とその当時のかくしきれない嬉しさを詠つてゐる。その当時幾度も／＼私に電話をかけてきて、いつもふ／＼と笑ひ声で切つていた。

過ぐる日、由布君と私とで句集「冬の河」を編むことでお訪ねしたことがありました。玄関に花が活けられてあり、病室にも水筒が生けられてあり、彼の花好きと奥さまの心尽しがゆきとゞいていました。花のにおいにむせかえるほどでした。彼は静かに本を読んでいました。一時間程話してお暇

ました。それから二年後にまた句集「壺」を編むとき、小康を得ておられたので、哲水抄をその中に発表され嬉しうでした。病篤くなるとともに、覚悟はせられていたのか心友鮎美にも一ト言の弱音も洩らさなかつた。あまり訪ねるのもかえつて彼の神経を尖らすようなものゝ自然にまかせていた私に、なつかしうに眩をしながら電話をかけてくることも度々ありました。

今年の一月十四日奥さまからの急報があり、即刻彼の病床をたずねた私は、剛腹な彼も半歳ほど会わぬ間に、ひどく瘦せ衰えたなと思つた。実母と奥さまの風夜兼行の看護に、彼はうれしく泣いていた。初めて哲水君の泪をみた。「この瘦せつぼちは鮎美さんだけに見て貰うだけで結構だ。路郎先生によろしく、柳人諸彦によろしく」と體はまるくて子供のようだった。

計報をうけた六月二十三日(告別式当日)さつそく路郎師にお知らせして夕刻先生といつしよに築面へ出かけ、靈前に最後の合掌をいたしました。

君の声が大空から降りてくるよ

追悼 鮎美  
七月十日 鮎美







いのある句を創れ



投稿規定

用紙は原稿用紙 文字は正  
随 開催月日及場所記入  
切毎月二〇日 投稿先本社宛

本社八月句會 (大阪市)

八月一日 午後六時

於 光明寺

三伏の暑さに挑戦せんとする作句熱狂  
盛な作家達で会場は満員であつたが、庭  
前からの青葉吹く風は涼を入れるに充分  
であつた。開會に先立つて不朽洞会理事  
長中島生々庵氏より不朽洞会員大西野介  
氏の計が報ぜられ、出席者一同一分間黙  
禱を捧げた。路郎師の柳話は個性の現れ  
た川柳に就いて述べられ、鮎美氏の句評  
は茶々・喜由・夜潮・潮花の諸氏の句を  
挙げて短評を加えられた。兼題、席題の披  
講後不朽洞賞優勝カップは一瓢氏(本年  
度二回目)が把握した。閉會九時(幹事)  
出席者 路郎・杏花・夢生・しげを・圭  
三・紅山・正斗・清・悦郎・鮎美・賀峰・玲人  
梅里・みのる・望峰・一瓢・一三夫・香  
林・水堂・与呂志・千代造・水茶・良子  
英一・凡九郎・雅集・扇子仙・万葉・夢  
裡・蜂呂・島浦・淡舟・和友・晴昌・博  
也・生々庵・六竜子・雄声・摩太郎・潮  
花・寛峰・一朗・牛歩・辰始・破天荒・  
ゆずる・春葉・花村・恒明・ひろし・文  
蝶・紫香・塗杖・眉水・雅集太・英始・  
少将・旅風・黙平・嘉一・悦子・麻由美

純也・白柳子・へとち・梨里・霞乃

兼題「海」 麻生路郎選

颯までの辺で水掛け合ふ男女 黙平  
洋行の海へ今宵は満月か 博也  
海のおおきに心中ふと恐くなり ゆずる  
古橋に続けと海の子のしぶき 悦子  
思い切り海へ恋しき名を呼ぼう 日本村  
夏の間われを忘れて親しめり 香林  
夏の間幾たり人をのむことぞ 摩太郎  
スタイルは満点海はつかるだけ 文蝶  
トリツクの海に飛び込びエストラ 悦子  
アベツクで来て貝殻を踏んでゆき 摩太郎  
大声で話合ふのも海育ち 淡舟  
君も僕もライスカレーへ海の風 万葉  
貸切りで海へ連れてく子供会 白柳子  
自殺者の心誘つた春の海 牛歩  
腕白はやはり海でもチャンピオン 晴昌  
故郷の海は鏡のやうに澄み 島浦  
どんと寄す波に失意を励まされ 悦子  
夜の間ひとり歩けばあやしまれ 恒明  
臨海学校ちやんと恋人出来て居る 賀峰  
海ひろし乙女は蟹をつかまえた 鮎美  
海女はもう海のひろさを忘れてる 一瓢  
海のきわに生れ鯛より知らぬなり 路郎

兼題「素人」 土井文蝶選

素人のカメラ日向へ並ばざれ 春葉  
素人にしては算盤こまか過ぎ 生々庵  
素人にかして鉤がわやになり 白柳子  
素人芝居仇と同じゆかたなり しげを  
素人を一人加えたドサ廻り 少将  
素人へサクラは一手だけ教え 眉水  
素人の恋は今にも死にたがり 日本村

素人にやたらにゴム靴ひねられる 紅山

色街に育ち素人とは見えぬ 紫香  
素人のくせにはつたりかまして来 梅里  
素人のつぶしたかしわ毛が残り 紅涙  
父ちゃんの素人大工で黒が住み 辰始  
素人が穴をつかんだ草薙馬 博也  
トウシロウばかりが密つて何を言ふ 破天荒  
素人には惜しいと月謝だけほめる 一三夫  
素人を連れて服地の問屋街 万葉  
素人の女に軽くあしらわれ 賀峰  
伴奏がやんでも素人気がつかず 花村  
素人の細工やたらに釘がいら 紅涙  
素人がいの一歩に釣り上げる みのる  
素人の気遅れ声の上りかけ 夢裡  
素人とは思えぬ意見吐いてある 塗杖  
素人の癖にポーズに難をつけ 六竜子  
素人はたどうん／＼と聞いてたけ 博也  
素人と言われ素人腹を立て 一瓢  
聞かされる立場気にせぬ且那芸 水堂  
簡単に言ふて素人たのみに来 白柳子  
素人の女形毛づねをぬつと出し 圭三  
素人の両手鰻に見くびられ 眉水  
鐘三ツ鳴つて素人野心が出 清  
素人の顔で二度目の見合をし 島浦

兼題「胸算」 松江梅里選

胸算をしてポリーナスの封を切り ゆずる  
胸算へピンとはねてる明石鯛 鮎美  
次の間があつて胸算術を替え 一瓢  
ツリがある筈と胸算引つ返し 黙平  
胸算がだん／＼安いものになり 紫香  
闘争に会社も胸算してねばり 望峰  
胸算へ女の影がつきまとい 鮎美  
胸算で割つて女と割り切れず 同

胸算でウンと呑み込むふきん手 嘉一

胸算に大きく掲げた絵看板 玲人  
トータルを取れば胸算成り立たず へとち  
女房の方が胸算確かなり 破天荒  
顔ぶれを見て胸算をやり直し 香林  
胸算へフツと疑惑の影が浮き 淡舟  
胸算が合つて落着く酒の味 水茶  
飲んでいる尻を胸算つゝくなり 文蝶  
胸算と別に自信の粋が有り 水茶  
胸算のきつちり残る電車賃 京一様  
胸算のピッタリあつた日の微笑 塗杖  
胸算と生活が別な新世帯 潮花  
胸算へ電話のベルがかき廻し 夢裡  
胸算をして決心がまたにぶり 圭三  
胸算をしてある内に乗り過し 雄声  
胸算はいつも無駄足ふんである 豚平  
胸算と違ひ柄だけ見て帰り 恒明  
ポリーナスへ夫婦は別の胸算用 夢生  
胸算へ金一封が少な過ぎ 少将  
胸算で慣れた幹事のあたま割り 梅里

席題「目葉」 北川春葉選

目葉をさし証文の印を捺し 鮎美  
目葉を妻に頼んで宵寝する 文蝶  
目葉の演技へ母と泣きに行き 悦子  
目葉をさして老母の手内職 ゆずる  
目葉をさしてフレンド欲しい歳 水堂  
目葉もハンドバックにある淑女 玲人  
目葉をさした目で見る土用波 一瓢  
明眸になると目葉信じきり 夢生  
目葉も持つて夜勤の門落る 六竜子  
目葉にまで片仮名が巾きかせ 杏花  
目葉へ猫もなか／＼目をあけず 潮花  
細君のひざで眼葉さして呉れ 圭三

ポケットには目葉があるサンガラス しげお  
 目葉へまぶたの皮がちと震え 雅楽多  
 徹夜した朝目葉を差しておき 淡舟  
 お茶を注ぐと眼科は目を洗い 眉水  
 目葉にいたしかゆしの意見され 辰始  
 恋の眼があんな目葉さしている 正斗  
 目葉は半分こぼす様に出来 破天荒  
 目葉をさしてやろうとあまさえ 万葉  
 帰省した子に目葉を教えられ 文蝶  
 服んで効く云々目葉を不思議が 春葉

席題「立見」 新川博也選

へそくりは立見の芝居見て帰り 牛歩  
 遠眼鏡借りて立見の母と居る 文蝶  
 立見席端役の声もきく分ける 杏花  
 立見席時々足の蚊をあおぎ 万葉  
 立見する後の人がどなり出し 嘉一  
 夜風を別々に来た立見席 黙平  
 立見席前の扇子が又あがり 島浦  
 強引に前に割り込む立見席 夢生  
 立見席子供抱いたり降ろしたり 同  
 立見席時々眩でこずかれる 一瓢  
 立見席首と頭の間をのぞき 島浦  
 立見席しきりにのが乾くなり 春葉  
 立見席足をふまれたまゝである 恒明  
 立見して脊のびの足がもう疲れ 雅楽太  
 立見席汽車の時間へまだ早し 万葉  
 笑ふだけ笑ふて帰る立見席 扇子仙  
 ポケットを忘れずにいる立見客 千代造  
 足元で何かころがる立見席 潮花  
 冷房の風がまともな立見席 恒明  
 花道の話立見は略しとき 杏花  
 これで二度台詞覚えに来た立見 黙平  
 立見席便所がブンと匂ふなり しげを

劇評を書かねばならぬ立見席 万葉  
 汗臭い首のうしろにいる立見 扇子仙  
 アイキヤンを噛んで見ている立見席 鮎美  
 代役の詫びえ立見は納まらず 玲人

席題「蚊帳」 西森花村選

お土産はほろ蚊帳で故郷の母 千代造  
 蚊帳吊つて電気を消して戸を開けて 旅風  
 寝返りの度ににじらす枕蚊帳 万葉  
 息してるやろかとのぞく枕蚊帳 恒明  
 蜻蛉とる姿勢でかける枕蚊帳 黙平  
 古蚊帳に梅雨の匂ひが未だ残り 杏花  
 珍客へ慌て、蚊帳を仕舞い込み 賀峰  
 脱稿の蚊帳の中なりウキスキ 鮎美  
 老夫婦蚊帳の中にもナムアミダ 雄声  
 蚊帳の中何やら動く気配だけ 凡九郎  
 朝の蚊をそのまま蚊帳にこみ込み 生々庵  
 蚊帳のなか社会時評をしてる父 和友  
 勧誘も小さく話す枕蚊帳 紫香  
 蚊帳畳む足へ見覚し鳴りつけ ゆずる  
 入れた蚊の行方が蚊帳に見当ら 黙平  
 枕蚊帳去年と違ふ声で泣き 摩太郎  
 蚊帳張つて本家の灯りくらぐら 紫香  
 二人して釣つたる蚊帳の紐が解け ひろし  
 新築へ水族館の様な蚊帳 麻由美

雑川 出雲支部 (出雲市)

六月十一日 於野村岬月居  
 尼 緑之助報  
 漬物の石に朝寝を起される 壮  
 ぬかみその事にもふれて涙する 岬月  
 詫びて来た便り依怙地な父も説 代仕男  
 倅せでいますと宛先のない便り 緑之助  
 表札の名はやさしくて警察官 独仙

雑川 備前支部句会 (岡山県)  
 六月六日 於大森婿向葉居  
 浜田久米雄報

百億の貯金へ二役買うて出る 正州  
 求婚に貯金の額も匂はせる 甘井子  
 新築の我家を眺め又眺め 浄美  
 日焼した顔が並んだ麦の膳 歌流児  
 統制がとれて麦等目もくれず 清風  
 麦刈を涼しく通るハイヒール 半仙  
 麦めしを食うて落ちつく旅婦り 東岸子  
 一杯はよけいに食える麦の秋 柳穂  
 無器用な手で通帳と札を出し 運型  
 農繁へスタートを切る麦が熟れ 柳風子  
 父さんにインチキがある給料日 娘句楽  
 平通りしたサーブिसがあつた 久米雄

雑川 淀川支部 (大阪市)

五月九日 於香林居  
 武部香林報

カラットが解らぬままにほめて居り 礼三  
 女手で生きる模造の耳飾り 水堂  
 宝石に縁ない路次の暮し向き 同  
 質屋から出ても宝石よく光り 花村  
 二階借り寝るには惜しい遠花火 香林  
 尺玉が消えてビールをポンと抜き 同  
 打上げの花火に闇の高さ知り 花村  
 遠花火恋のもつれもあのあたり 香林  
 家中の下駄一通り子に履かれ 礼三

雑川 日立櫻島支部句会 (大阪市)

六月十八日 於日立造船所  
 丸尾潮花報

新婚の日曜二階から降りず 望峰  
 新婚はまつすく去ねとからかわれ 花世子  
 増えて行く家具も新婚らしい艶 呑水  
 新婚へ母は婦徳を説いて去に 一球  
 全快へまだ喰べ物に気を使い 清潮  
 腹痛はなお梅干まだ残り 支米  
 全快の指一本はなかりけり 一瓢  
 梳髪でよし全快の小豆飯 ひさみ  
 入院へ親も泣きたくなつて来る 牧湖  
 入院は次に生れる子を描き 潮花  
 山びらき待たずピツケルから出 京花  
 湯上りへかけた浴衣の線太し 春猿  
 初夏の子の希望まだく 淡山  
 中の島初夏が来たらしポットの灯 千代美  
 愛人の素顔が白い蜃籠 呑水  
 にじみ出る初夏を吸てる初夏の風 定美  
 生きて行く希望二号ももちあせ 花子  
 本妻に二号の若さねたましく 幸子  
 二号の娘母を泣かせた金で着る 花津美  
 妾腹に生れ本宅まばゆがり 万寿子  
 旦那とは名のみ二号は色を持ち 花美

雑川 岡山支部句会 (岡山市)

六月十四日 於山陽旅館  
 大森風来子報

阪田謄写版  
 大阪北区芝田町二五  
 株式 阪田商會  
 電話 五六一三  
 福島 九五一九  
 番一四

女子寮はかわりばんこに傷心し 惠二朗  
 傷心をババはお医者へ行けさし 菟児  
 傷心にふれず一本つけてやり 民徳  
 水盤傷心の娘を死に誘い 秋芳  
 子供なりの傷心じつとうずくまり 節子  
 傷心の娘が戻る駅母が立ち 禅一  
 傷心が下戸で労働のに困り 笑気坊  
 後添へネクタイまでも若返り 直人  
 ネクタイを二号に結び直される 乱酔  
 ネクタイの売場に立つて若返り 馬洗  
 母さんの涙見ながら気が変り 宇柳  
 病上り軽い釣竿選つて行き 一角  
 釣竿で畳をたたく大掃除 竹生  
 どんな竿でも船頭は釣つてみせ 大介  
 釣竿のしなえは店の外へ出て 青柳  
 釣竿とピタを笑つて女将とり 谷水  
 釣竿の届かぬとこで魚が跳ね 意坊  
 釣竿へ惜しい夕日が落ちかゝり 笑陽  
 荷造りの端細帯で間に合わせ すみれ  
 一入では帯の結べぬのに嫌ざり 風来子  
 帯とつた女ほんとの息をする 正一  
 落選の記念となつたりボンなり 千容  
 愛情の手紙リボンで束ねられ 大甲帽  
 酔うて来たドロンコ庭で脱がされ 舟菜  
 末席の酔うた話にトゲがあり 八ツ茶

川 下関支部句会 (下関市)

七月十二日 於 下関駅

石川侃流洞報

いさかひのもう照れさし今朝の膳 妻揚子  
 風呂上り満ち足りた気の爪を切る 同  
 翌朝にしるしと帖場へ声をかけ 良坊  
 散歩道行水の子が声をかけ 同

恢復期散歩へ自信ついてくる 伊三男  
 もう妻はこゝまで読んだ爪じらし 戌理智  
 せがまれて散歩がてらの螢狩 同  
 爪に火をほして今日のビルを建て かうたる  
 アベツクの散歩は坐つてばかり居る 仁美  
 包み糸粗末にしない母の爪 ほなみ  
 朝露を下駄一杯に踏んで来る 同  
 税吏来て散歩のあるじ道をかえ 一鶴  
 のびている爪に気づいて茶をよはれ 柳慶  
 インターン古参患者に見くびられ 藤市  
 アドルムの量翌朝を待たぬ脉 柳娃  
 祖母の眼が光る襖の爪の跡 土筆坊  
 夜店まで西瓜を買いに行く散歩 侃流洞  
 爪染めることを覚えて卒業し 同  
 急患の電話看護婦ねむくうけ 蘇入  
 病院の廊下へなれた顔で待ち 同  
 病院へ通うに目の毒多過ぎる 司棧

川 弓削支部句会 (岡山県)

福島鉄児報

のれん又諦め切れぬ給料日 土器  
 給料は念を押されて勤めに出 鉄児  
 妓を知り初めたのも給料日 奇童  
 口止め一杯買ふた丈けが損 白頭  
 口止めを忘れて喋る話好き みよ子  
 口止めに耐を一杯所望され 七面山  
 口止料と言わずまあくさって置け 一貫  
 口に指あてゝ言うなま云ふ素振り 鉄児  
 口止めをされた事だけ付け加え 不老  
 失礼な無口な僕へ口止めし 牛歩  
 茶の間から云ふ妻の眼が知らぬ 大戸  
 恐妻家夜なべの妻へ茶を入れる 鳴子  
 どの子にももつれられたる恐妻家 同

川 阿倍野支部句会 (大阪)

六月二十七日 於 西光寺

須崎豆秋報

女給さんの眼にも可笑しい恐妻家 七面山  
 日曜を訪えば哀れな恐妻家 笑泉  
 運命が活字になつて決まるくじ 風樹  
 運命を托すみ簾へ手がふるえ 鉄児  
 大吉と出たおみくじを不安がり 牛歩  
 大吉と出たおみくじを不安がり 奇童  
 おみくじは凶母だけはまだ信じ 笑泉  
 母の目の届かぬとこで喰い過ぎる みよ子

毛生菜もうあきらめた光りよう 好郎  
 毛生菜まがほで塗つている鏡 梅里  
 毛生菜買つてしげ／＼顔見られ 昭夫  
 突然に寝呆け家計の事を聞き 唯義  
 寝呆けなさんはお妾の別れる気 水客  
 寝呆け三人起して今日も母の朝 忠治  
 少しづゝ児がちぎつて行くすだれ 凡九郎  
 お隣の外出すだれからのぞき 白溪子  
 後輩のおかけ淋しく職につき 一香  
 鼻先でおかけを笑うている若さ 恒明  
 棺手は今日いちにちの無事の音 野介  
 人前には妻のおかけと云ひ流り 日本村  
 石段の高さにおかけをうけに行き 春柳  
 借るときのおかけ／＼をもう忘れ 梅里  
 悪友が本復なれば飲めといふ 貴山  
 本復のしみ／＼妻のしわを見る 晴峰  
 本復へ妻はパーマも延びたまふ 好郎  
 こんなにもようならん見せ歩き 光風  
 本復の鯛は妻子に取りまかれ 野介  
 本復をして遺言を書き直し 葉光  
 本復を祈りつゞける友だつた 亜純  
 本復へしみじみ酒の琥珀いろ 豆秋

小兒科 内科 性病科  
**安岡醫院**  
 安岡三四郎  
 道頓堀・日本橋南詰  
 東へ半丁浜側  
 電話南⑩三二四六

ライバルの本復祝開けもせず夕霧  
 吉日に猫は欠伸をしてゐたり 亜純  
 吉日といへどおしめはほしてあり 賀峰  
 吉日の金は何処からとも廻り 小松園  
 坐る間もない吉日の台どころ 路郎

川 堺支部句会 (堺市)  
 六月二十六日 於 摩天郎居  
 八木摩天郎報

にせものさ知つて道具屋買つて置き 鹿の子  
 にせものがありまふ云うにせもの屋 摩天郎  
 にせものは鐘馗が横を向いただけ 春翠  
 にせものゝ六神丸ですぐとまり 山鈴  
 河童の邪恋に水音がする 三絃  
 河童天国彼女はパーマかけてゐる 山鈴  
 お地藏さんの前も河童手をうなす 水客  
 河童の子狸御殿へ行て見たり 潮花  
 河童今日岡へ上つた不倅せ たかし  
 雨氣の篝火河童の血湯く 葉光  
 河童ふと浮べば夏の陽の強く 夢遊  
 水鏡河童つく／＼いやになり 潮花  
 河童ふと鯉のキツスを見てしまし 春翠  
 ダムになる噂河童が疎開する 葉光  
 貧乏の苦勞達者にして呉れる 潮花  
 麦の穂へ牛も養子もみな達者 潮花

口達者手はそれ程に動いてず 圭水  
 狸寝の横で達者な口を利き 水客  
 出世せよとはまだ早い子の寝顔 夢遊  
 常連の議論も閉店になつてケリ 淡舟  
 耳打ちですんで常連外へ出る 凡九郎  
 常連と云う気易さにシヤツのま 夢遊  
 常連が今日は飲み屋のお手伝い 雄声  
 常連はチップも借りて帰るなり 淡舟  
 常連はタオルを借りて風呂へ行 山鈴  
 常連はマダムの見える席をとり 貴山  
 如才ない話買ふ氣を打診する 凡九郎  
 商魂はまだ灯のともる二時三時 たかし  
 商魂はオランダ舟の昔より 摩天郎  
 不敵なる商魂を持ち頭が低く 鹿の子  
 先代にすまぬ商魂ベチンコ屋 貴山  
 ともかくも電話を引いた名刺刷 水客

雑川 京都支部句会 (京都市)

於 仲源寺  
 村松夢裡報

マニキユアの手に銀盆の夏みかん 折草  
 ワンサイドゲームとなつて夏みかん 花笛  
 夏蜜柑転げた位置へ寝転べり あきら  
 雨告げて二三組来る地下茶房 司郎  
 雨の画の女は橋をはすかにに ゆきら  
 さんくくと雨傷心をいらだたせ 夢裡  
 雨に負けるものかエントツの煙青二 青二  
 天を指し地を指し人の道を説き 鳥雀  
 大臣の食指百燭光の下 紫蘭  
 すでにもう食指へ女堕ちてゆき 絵丘  
 その道の女将食指の的を知り 蘇海  
 微妙なる空気の中にある食指 好浪  
 眼をつむりたれど食指のたかぶらぬ 豊次  
 何気なく向いた視線を会う食指 草之助

食指動氣配へ株屋見逃さず 夢裡

雑川 大聖寺支部句会 (石川県)

六月二十五日 於 福 貞人 居  
 野村味平報

御饅米袋五合は入りそう 卓風  
 茶袋につきあてる程妻は忠実 同  
 風呂敷も袋に入れて里へ行き 酔羊  
 新刊の名だけインテリ知つて居 高野  
 新刊を飛び読みにする通学児 味平  
 頬被り町へ出るのが別にあり 高野  
 頬被り声のいゝのが音頭とり 桃園  
 胃袋の今日は驚く里帰り 光郎  
 ポチ袋捕まりたい気ゆるく逃げ 同  
 叩き売りサービスだけの品を増し 真人

雑川 濱寺病院支部句会 (大阪府)

贈所新三報

サンダルは爪の手入れもよくぞき 文糖  
 爪弾きは母の得意の萩の露 同  
 淋しさにたへて爪かむくせがツキ 風鈴  
 もうこゝで夜店ほしまい螢壳 同  
 洋装が似合うと云へば爪も染め 秀麗  
 爪染めて故郷へガムも派手に噛み 秀月  
 海の幸おどる夜市へ母をつれ 桂月  
 鶏小屋へ梅雨に備えるりりり 同  
 夜店にて人ごみくゞる子に疲れ 閑古鳥  
 公聴課梅雨の場末に眼をつむり 漫多朗  
 梅雨に入り妊婦の母は氣をつかい 桜天  
 奥伝も梅雨のせいかな音にこる 一鶴  
 買ふ当もないが夜店へ足が向き 酔月  
 空を見て皮算用の夜店出し 溪泉  
 買はぬ氣で値切れは夜店さつこまけ 白娥

川柳友の会 (大阪府)

六月十二日 於 帝國化工大阪工場  
 佐野牛歩報

色あせたカーテンつって嫌も老け 二代  
 カーテンが無気味に白い手術室 英治  
 カーテンに基地の苦惱が浮彫りし 雅楽太  
 カーテンを開けば富士が入る窓 京一樓  
 生活にしぼられてゐるナツバ服 一朗  
 ナツバ服倒れた会社起す意気 牛歩  
 停年へふとナツバ服引き出して 一平  
 ナツバ服七人家族をよく育て 葉乙女  
 スタンドで吉田が何だナツバ服 十九一  
 あわてればあわてる程に冷汗出 辰始  
 微熱あり寝汗続いて友は病み 翠風  
 馬と汗舖道タイヤの後が付き 京一樓

みをつくし川柳会 (大阪府)

七月十四日 於 天王寺中学校  
 戸田古方報

つかまれば飛んで行けそなアドバルーン 古方  
 アドバルーン横にねている午前九時 賀峯  
 ターミナルアドバルーンも振りむかす 凡九郎  
 アドバルーン風と語らふほかはなし のぼる  
 アドバルーン五ヶ月月賦の字がゆるる 正斗  
 玉屋鍵屋今日ラヂオに聞く花火 凡九郎  
 打上げた花火寝床の中で見る 賀峯  
 打揚を二階の窓でみる扇子 凡九郎  
 アドバルーンお腹空いても下りられず 雄声  
 花火にもせつかなのがあるぞ知り のぼる  
 風車まわり出したら眠つて居 同  
 風車坊やおめゝばちつかせ 光二  
 風向きを察して女房さからわず 圭水

雑川 青葉の會 (吟行)

六月十四日

ターミナルに来てもつとる緑地帯 へとち  
 山小屋へ緑の風が突きあたり 玲人  
 緑一色おもうこと無し煙草の輪 香林  
 巻ずしの中をつまんで食べ残し 正則  
 引揚げて来て巻ずしの作り方 玲人  
 女客巻ずしだけをさきにたべ へとち  
 巻ずしを巻けば子供も行くぞ云う 雄声  
 巻ずしの手際嫁女を一寸着め 梅志  
 巻ずしの中だけ食べる乳母育ち 栗  
 ブランコを押す役祖父も老い給い 同  
 ブランコのそこらあたりに折のから 同  
 ブランコの足の向うに雲流る 香林  
 ブランコへママの青春驕り 生々庵  
 ブランコへイケズとされる娘の仕草 栗  
 ブランコへ末つ子だけがほつこかれ 梨里  
 ブランコへ来た修学の列乱れ 正則  
 ブランコへおつく俺に似た児哉 梅志  
 ブランコへ和服のマ、を無理に乗せ 生々庵  
 ブランコで風をきる間は世を忘れ 雄声  
 ブランコの真下に見える父と母 路郎  
 子ぼんのう子のブランコをパチリ撮り 同

東京そばと 灘一とすじ

アベノ橋地下映画食堂街

大 萬

梅里の店

★大万川柳(第卅回)を募る  
 兼題一女 灘一路郎先生選  
 締切・九月十五日 包郵五角以内  
 発表・九月廿一日(店内に掲出)

御投句は大万宛・どなたでも

### 南海電鐵川柳会 (大阪市)

五月廿五日 於 粉浜親和寮 友淵貴山 報

内職の職場となつた奥座敷 革新も保守もまじつてよい職場 女房は職場の恋のなれの果 職場長私生活まで聞いてやり 金魚また子供の掌へ驚かされ 金魚まで飛行機に乗って飛んで行き 伯州

## 柳界展望

▲本社川柳忌句会は 九月十二日「第二土曜」午後六時から下寺町の光明寺で開催される▲水族館開設記念川柳会が川雑支部堺川柳人グループ主催で八月三十(日)午後一時から堺大浜市立水族館で開催される「船旅」路即選「昆布」生々庵選「竜宮」葎乃選「蛸」貴山選、会費三〇円入場券共、協賛堺市、堺観光協会、南海電鉄▲哲水追悼句会は八月九日午前十時から箕面滝安寺で開催▲大阪市警視庁警察部警察学校文化講座(川柳講師、麻生路郎)は八月十四日午後三時から開講▲大阪通信病院川柳会は八月廿二日午後二時から三階図書室で開催▲南区医師会文化部杏林川柳会は八月廿三日午後二時から信貴山常福院で一泊句会▲南海電鐵川柳会は八月三十一日午後六時から粉浜の親和寮で開催以

寐来る日今日は金魚の鯛をうな 食慾をそゝる味覚は妻のもの 食慾へ明日の勤めが又楽し 大物の口がこつた車中談 大物も選挙にだけは帰つて来 大物が頭をろえて座がしらけ 大物と云われ戦犯とも云われ 大物の顔も電柱へ貼つたまき、 大物を押しの一手を出さばかり 大物と撮した写真みせ歩き 路郎

御堂筋お向いさんえ通じかね 御堂筋まぬけた顔も二三三人 御堂筋恋も並木も濡れてゐる 五十年化粧も知らずよい女房 母として生きたる素顔の未亡人 神様に仕え通して来た素顔 願ひ事素顔素足目尻あげ 注意され戦後派派目尻あげ 書きすぎた注意三面記事となり

過去の悔チラリとよれ注意聞く 注意する二仲が長い文となり 時間表きつちり過ぎて乗り遅れ 広告の中の時間表よるこぼれ 時間表調べつくして式近し 時間表通りに電車は来てくれず スピードアップ時間表また変り 時間表遊ぶ時間は書いて無し 時間表乱して御召列車着き 時間表小指の先が追うてゆき 聞き合セバツタリ素顔を見せし

上何れも路郎主幹出席▲川雑備前支部(岡山県)は七月十八日(日)にうどん句会を開催▲川雑弓削支部(岡山県)では九月二十日に西日本川柳大会を弓削小学校講堂で開催する▲川雑岡山支部七月例会は十二日夜山陽旅館で開催▲広島川柳会七月第一例会は十五日、第二例会は七月廿五日午後六時から広島貿易館で開催された▲水島公民館川柳の会(倉敷市)は七月例会を十八日夜開催した▲堺名物大浜夜市川柳大会(堺市)が堺川柳人グループ主催で七月三十一日午後九時から寺地町の英彰小学校で開催された▲三井造船川柳句会(玉野市)は七月三十日に開催▲裸川柳大会(唐津市)は八月九日午後一時から虹川柳倶楽部主催の下に舞鶴公園中段条で開催された▲大原諷柳会(岡山県)は八月五日地久平居で八月句会を開催▲川雑弓削支部八月句会(岡山県)は八日の夜、金光教会所で開催▲青蛙川

柳会(伊丹市)は八月十日午後五時から健康会館楼上で開催▲川雑淀川支部句会(大阪市)は九月八日午後六時から香林居で柳翁忌を開催する兼題「川」「柳」「言訳」▲波川海水浴場川柳大会が八月九日に開催された▲河田五風氏を送る小集(岡山市)を山陽川柳同好会が八月十一日に山陽新聞社で開催▲今治川柳協会で八月二日に浅川海岸で納涼句会を開催した▲海浜川柳大会が福岡川柳倶楽部主催で八月二日長垂海水浴場で開催された▲電気通信省では電通記念日行事の一環として募集する書画文芸作品九種目の中に新に川柳を加えた▲杜人(仙合)が七月中旬復活号を出した倍日の活躍を期待する▲川村花菱氏は七月九日文化日本から「銀座の時間」を放送▲川上三太郎氏は七月十八日文化日本から「川柳の話」を放送▲麻生路郎氏は八月廿五日朝七時半、BKから川柳生活五〇年記念放送をさ

れる▲坂澄風氏(大阪市)は三十二年間勤務された大阪市水道局から今回勇退された▲三木香平氏は(津山市)鍛冶町二九杉山香縁園内へ移居▲龜崎漫歩氏は山陰合同銀行鹿野支店長に榮転▲月原宵明氏は今治市泉川通へ居を移された▲河田五風氏は名古屋千種区朝岡町一ノ二小野芳三方へ移居。

ことにした。本社の選者は一ヶ年の内に六回以上、本社句会に出席又は六回以上「川柳塔」或は「同舟近詠」に出句しなければ翌年度は選者としての待遇から除外される(年度は一月一日に始まり十二月卅一日に終る)従つて二十九年度の選者は二十八年一月から十二月までのせいせきで決定する。この新制度は選者の冬眠を許さないし。新らしい選者の進出を促進することにともなり、指導性に活気を呈することとならう。従來の選者は二十九年度の選者資格を喪失しないよう本年の九、十、十一、十二の四ヶ月に句会が誌上出句か選者資格を確保されたい。この更生案は不朽会会の常任理事会の賛同を得たものである。

### 社の黑板

#### 課題吟の募集句数が殖える

▲課題吟は従來一題十句以内を募集していたが、十月廿日締切の課題から投句家の要望に依えて二十句以内と改めた。旺んに応募されたい。

#### 選者制の更生

▲本社の選者制を左の通り改める

残暑御伺

橋本晴之助

津山市美濃町



### 編輯局にて

★新涼と共句作にシーズンに入る  
 欣びは大きい。柳翁忌がついそこ  
 に見えたので句作も本格的に軌道  
 に乗ることと思う。大いにガン張  
 つていただきたい。★編輯部の各  
 員は暑い〜と云いながらも、キ  
 ンペンであり朗らかである。暑く  
 とも寒くとも梨里編輯長には寧日  
 がない。昼夜兼行で働いている。  
 その忙しい中から、四日の夜行で  
 岡山の金光詣りに出かける熱を持  
 つている。春泉博士は私がNHK  
 で放送した朝の訪問の放談を、レ  
 コード五面に入れたのを持参して  
 編輯部のデンタクにかけて悦に入  
 つている。没食子薬局長はいつも  
 一バイきこしめして来て編輯局を  
 ジャズル。近來本職で多忙な潮花  
 も編輯の余暇に一さし舞うて景気  
 をつける。一瓢、摩太郎はそうし  
 たアトモスフェアの中で黙々とペ  
 ンを走らしている。病山雨楼は遠  
 く横浜から編輯局のゲキレイにお  
 さ〜意りない。終戦後再び太つ  
 て来た古方、顔中からボタ〜汗  
 を落しながら編輯局へ飛び込んで  
 来る熱心さである。★今度我社で

別稿のように選者がボヤ〜して、も刊行してやろうと云われるので  
 いろいろな制度を設けた。それに  
 応えて作家もフンドシを締め直し  
 もらいたい。★本号は前田伍健  
 氏の精鋭揃いの句評をはじめ、東  
 野大八氏の「人間横丁」の続稿、  
 阿達義雄氏の「川柳江戸船漫頭」  
 北川春葉氏の「勤務医と走り医」  
 八木摩太郎氏の「掬の句を拾う」  
 等々々、好読物の満載である。相  
 変わらず、私の書くスペースがな  
 い。次号あたりから増ページでも  
 して、大いに書くべく努力したい  
 と思つている。★いよ〜私の句  
 集「旅人」が世に出ることになつ  
 た。私は従来、句集は出さない積  
 りでいた。理由は至つて簡単であ  
 る。自分の一生を通じてこれなら  
 と思ふ句が十指に足らぬであらう  
 と考へていたからである。いろん  
 な方々から度々懇切に出版してや  
 ると懇願されたのであるが、いつ  
 もことわつて来た。私の川柳生活  
 四十年の時にも川柳不朽洞会から  
 是非にと懇望があつたので、それ  
 ではと云ふことになり、戦時中の  
 あの物資の乏しい時代に、苦心し  
 て紙まで入手していただいたので  
 あるが戦禍で焼失してしまい、敗  
 戦で句集どころでない時代となつ  
 たので、句集の刊行企画も遂に立  
 消えとなり、今日に及んだのであ  
 る。今回の企画も最初はおことわ  
 りしていたのであるが、どうして

も刊行してやろうと云われるので  
 ありがたくおうけした訳である。  
 拙い句なので改めて見ていただく  
 ほどの句でもないと思うが、さて  
 出るとなると我が子が生れるよう  
 な欣びを感じて居ります。しかし  
 売れなくて、お骨折を願つた方々  
 に御迷惑のかかるようなことがあ  
 つては大変だと案じて居る。私に  
 するとこれが句集の処女出版で最  
 後のものになるかも知れないと思  
 つているので、ヤレ〜売切れて  
 よかつたと路郎を最後までよろこ  
 ばしていただきたい。★終りに、  
 暑中見舞を下さつた方々、暑中の  
 交歓広告をお出し下さつた方々の  
 御好意を深謝する。(路)

### 不朽洞

### 会から

▲梁山快夢起  
 氏(ホノル、市)は夏乃女  
 史の「帰化」  
 の選評を七月十二日夜の沙光居の  
 句会で発表された由 ▲福田山雨楼  
 氏(横浜市)は近ごろからだの調  
 子は良好だとのことよろこび申  
 上げる ▲直原七面山氏は七月十八  
 日午後、銀座の山陽新聞東京支社  
 に藤本満年氏を訪ね久々に柳談さ  
 れたと ▲本田恵二郎氏(岡山県)  
 は七月廿四日に隣田町町の瀧川柳  
 社句会に出席されたと ▲政田大介  
 氏(岡山県)は七月十二日夜オート  
 バイで転倒、肋骨が折れたので目  
 下静養されている ▲岩島雄歩氏(大  
 阪市福島区茶田町八〇角一阪神  
 寮)の祖父清次郎翁が七八才の高  
 齢で七月廿八日に郷里岐阜県妻木  
 町で亡くなられた謹んでお悼み申  
 上げる ▲直原七面山氏(東京都滯  
 在)は七月廿五日午後、横浜に福  
 田山雨楼氏を見舞われ約一時間半  
 にわたつて同氏の熱心な柳談を拝  
 聴されたとお八月五日午前帰  
 岡の途、不朽洞へ立寄り洞主と飲  
 談された ▲福田丁路氏(高槻市)、  
 は公用で札幌市で開催の八月三、  
 四日の会議で札幌へ出張「高原の  
 大氣に牛が風寝する」の句を寄せ  
 られた ▲中島鉄洲氏(鳥取県)が  
 七月初旬から内臓疾患で由良の病  
 院に入院されている詳細が判らな  
 いので案じている ▲水谷竹荘氏は  
 八月十一日家族同伴で天ノ橋立に  
 遊ばれ城崎、有馬へ廻つて帰阪す  
 るとのこと ▲蛭子省二氏(愛媛県)  
 は七貫八百に捜せられ右眼殆んど  
 失明だとのこと同情の外ない ▲浅  
 田右門博士の一周忌に「浅田一記  
 念」が刊行され知人に頌たれた ▲  
 大西迷窓氏は高知市追手筋五七、  
 八交響生試験所へ転動された ▲丸  
 山三平氏は家事の都合で七月限退  
 会された ▲狩野燕子氏は一身上の  
 都合で七月限退会された ▲路郎句  
 集の刊行其他につき七、八両月に  
 十数回の常任理事会が開催され、  
 八月十五日夜は理事会を開催した

### 新会員紹介

- 九月
- 松村万古(倉敷市)正
- 藤井春日(倉敷市)正
- 以上 風来子氏 推薦

Printed in Japan

### 募 集

- 課題吟募集
- 外交 (十句) 橋本 綠雨選
- 故郷 (十句) 古川 麗花選
- 思ひ出 (廿句) 正本 水客選
- バスガール (廿句) 富岡 淡舟選
- 每號募集
- 近作柳樽(雜詠廿句) 麻生路郎選
- 川柳塔(雜詠) 麻生路郎選
- 文章(評論・研究・感想其他)

### 投稿規定

▲投句は各種必ず別紙に認め、住所氏名雅号を明記する事。  
 ▲「近作柳樽」は一般作家の雑吟を募る。  
 ▲「課題吟」は何人でも投句が出る。  
 ▲「川柳塔」への投句は不朽洞会員に限る。

### 川柳雜誌 第九号

定価 四〇円 (送料四円)  
 半ヶ年 二六四円  
 一ヶ年 五二八円

昭和廿八年八月廿五日印刷  
 昭和廿八年九月一日発行  
 大阪市住吉區内方四丁目二番地  
 大坂市住吉區内方四丁目二番地  
 行編輯人 麻生 幸二郎  
 發行所 川柳雜誌社  
 電話 口麻六七五〇

# THE SENRYU ZASSHI

NO. 316

Published monthly by Senryu Zasshisha, Osaka, Japan.

これからが大物!

加太小島  
谷川淡輪  
箱作和歌浦

魚つり電車 なんば 毎朝5時發 **南海電車**

酒販用紙コップ 食堂用紙製品一切

アイスクリームは  
堅牢で衛生的な  
この容器で

特殊紙器工業株式会社  
フタバカツプ株式会社  
大阪市阿倍野区清明通一丁目  
電話 天下本局 66 2502・2503

避妊には..  
ゼリー剤を!

★溶ける時間かゝらず速効且つ確実で運用しても無害  
★注入器で深部へ送るから、タンポンに負り御使用をノ

**サンシー**ゼリー

1瓶 2 太郎 3 サンシー